



TITLE:

人文 第66号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第66号. 人文 2019, 66: 1-59

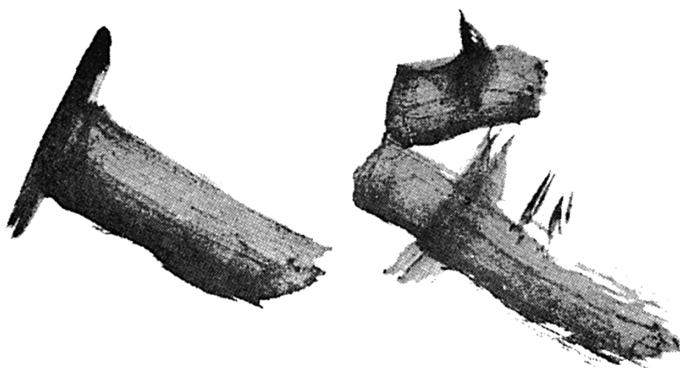
ISSUE DATE:

2019-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/242946>

RIGHT:



第六六号



2019

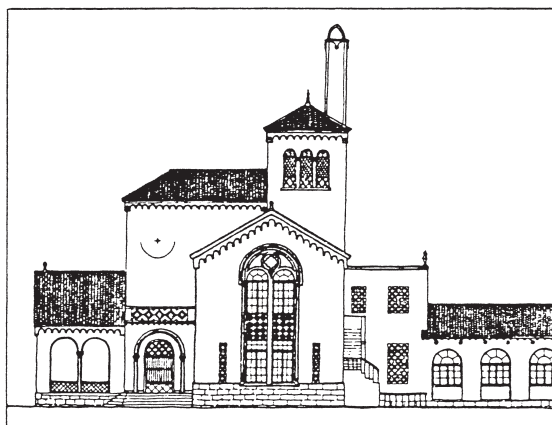
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第六号

2018年4月—2019年3月

も く じ



随想	1
京都の印象	・ 焦 建輝
「地元」を思う	・ ホルカ・イリナ
講演	8
夏期公開講座 名作再読12	8
「驚の果」からアガサ・クリステイを眺めると	・ 宮 紀子
探検大学のバイオニアたち——長廣敏雄『雲岡日記』から——	・ 岡村 秀典
講演会ポスターギャラリー二〇一八	14
臺報	18
共同研究の話題	25
共同研究会の理想の形を求めて	・ 谷川 建司
「若手」が手を挙げるとき	・ 村上 衛
四書を学んだコンピュータはセンター試験の漢文を読めるのか	・ 安岡 孝一
「学際的研究」で損すること、得すること	・ 竹沢 泰子
所のうち・そと	35
ゼロから始める人文学	・ 白須 裕之
歴史家の黄昏時	・ 福家 崇洋
李公麟「五馬図」との出会い	・ 古松 崇志
図面の作法	・ 向井 佑介
書いたもの一覧	45

京都の印象

焦 建輝

『京都』——それは歴史考古学を研究する中国人学者からすれば、たいへんよく知られた名称である。漢代以来の歴史書には『京都』にかんする記録が大量にあり、もとよりそれはそれぞれの時代における首都をあらわしていた。二千年来、中国ではしばしば王朝が交替し、それにともなうて都の所在地もたびたび移動した。このため中国国内で『京都』と呼ばれたところは多く、とりわけ漢・唐という繁栄した時代の長安と洛陽は、天下にその名をとどろかせている。しかるに日本に京都が営まれたのは、唐代の両京を参照したとされ、洛陽はその淵源のひとつであるから、洛陽で文化財の研究に従事する私が日本の京都に親しみをいだくのはごく自然なことである。このたび縁あって京都大学人文科学研究所で洛陽の龍門石窟にかんする共同研究に参加できたが、それはこの京都を知るまたとないチャンスであり、日本人研究者の研究視角や方法論を身近に経験できたのは、ほんとうに喜ばしいことであった。

京都は美しい。気候のおだやかな季節だけでなく、嚴冬にあ



つても京都の美は覆い隠されることがない。街中を歩いていると、道路は広くないし、とても狭い小径に迷い込むことがある。そうはいっても、目の前にあるのは、空を突くような鉄筋コンクリートの息苦しい森林ではない。建物の間口や高さはふぞろいだ、それぞれに意図せざる統一と意趣があり、千篇一律の味気なさを感じることがない。とりわけ、あちらこちらに瓦葺きの切妻屋根や寄棟屋根の民家が建っており、それは今日の中国では農村ですら目にするのではない風景である。子供のころ、友だちとふざけて屋根に上り、瓦の隙間に生えているコケを掻き筆っていた思い出が、ふと脳裏に浮かび上がってきた。ふるさとの思い出が、この異国の地でよみがえってきたのは、まことに意外なことであつた。また、いたるところに寺院があり、木造の壮大な仏殿、高大な塔や楼門を構え、古色古香をただよわせている。境内に立ち入ると、翠緑あざやかな松柏がそれぞれ丁寧に剪定されており、心を込めて管理されている様子が一目でわかる。そんなところにも美があらわれている。またあるとき、霧雨の中、清水寺の前の小径を散策していると、和服の女性が傘を手に早足で前を去ってゆくのがみえた。霧の中に消えゆくその後ろ姿は、水墨の山水画をみるようであつた。

私の宿舎があつた左京区は、唐の東都洛陽を参考に設計されたものだが、洛は京都の別称であり、洛陽、洛中、洛北などの語を目にするにつけ、何かしら感懐を覚えざるをえない。われわれの洛陽もかつてはきっと美しかったにちがいない。



い、と。

京都は静雅なところである。ここでは現代生活と歴史文化が水と乳のように違和感もなく融け合っている。それは京都の雅な静けさによるところが大きい、と私は考えている。大道小径はとりわけ落ち着いており、東京や大阪のように混雑していないし、市井でかまびすしく騒ぎたてることもない。この静かなたたずまいに、南朝晋宋の陶淵明が詠んだ「廬を結んで人境に在り、而も車馬の喧しき無し。」という詩がふと思い起こされた。それは魏晋の高士が追求した境地であるが、ひよっとすると京都のようなどころをいうのではあるまいか。ここで瞑想していると、眼前には美しい光景がひろがり、身の回りの浮華を取っ払い、煩惱から解き放たれたような境地にすら到達させる。まことにすばらしいことではないか。

わずか三か月の短い間で、京都という都市を深く理解するに十分ではなかったが、私が京都から受けた強烈な印象は「雅美」の二文字である。この千年間は大海原が変じて桑畑になったように世の中がはげしく移り変わったが、京都は今なおこのような美をとどめ、来たる一千年の後も変わらず、この独特な静雅さと優美さが守られていることを祈念している。当然、もうひとつの「京都」——せわしなく先駆ける現代の洛陽が、けばけばしく厚化粧した現代の浮華を取っ払い、京都と同じような静雅さと優美さを備えた、かつての情景が取り戻せるよう願っている。



「地元」を思う

ホルカ・イリナ

「どこから来ましたか？」と度々聞かれる。何年前からだっただか忘れたが、わざとボケて、「大阪から来ました」と答える癖がついてしまった。あるいは、時々「奈良から来ました」と返事することもある。もちろん、私はどう見ても・聞いても日本で生まれたはずはない。

「ルーマニアから来ました」と真実を素直に明かしても、日本ではネガティブなイメージを持たれないし（ヨーロッパでは事情が違ふけれど）、母国に対して恥を感じているわけでもない（大して誇りも感じない）が、ただ、一五年も日本にいたら、だんだん色々と分からなくなってきた、と言いつてはできる。例えば、日本人の友達に「ルーマニアに来てください」と言うべきなのか、「ルーマニアに行ってみてください」と言うべきなのか？「帰国する」とは、どちらの国に帰るといふことなのか？また、研究業績の使用言語の場合は「外国語」だと評価基準が違ふと聞いたけれど、英語だけでなく、ルーマニア語も「外国語」としてカウントされ、逆に日本語はカウントされない



いのだろうか？

とにかく、このように困惑していることも事実だが、大阪や奈良を自分の「出身地」として挙げているのは、それだけではない。奈良は、来日の時に始めて踏んだ日本の地（まあ、正確に言えば、それは関空だったが、埋立てだから、どこの地なのかは定かではない）であり、大阪は一〇年以上住んだ地である。また、活動範囲はもう少し広く、ここ四年半の所属は京都大学であり、兵庫県のいくつかの大学でも非常勤講師の仕事をしていたので、関西を縦横に行き来するのが私の日常だったといつて良い。

しかしそれよりも、「地元関西」を脳裏に焼き付けたのは、「文学散歩」という日本独特の（？）課外活動である。来日後、約三年間住んだ奈良教育大学の国際学生宿舎は、志賀直哉の旧居から二〇〇メートルも離れておらず、「散歩」するほどでもなかったが、毎日のようにその前を通り、身辺を描いた小説から志賀の奈良・関西生活を想像し、目の前の景色と見比べてみるが多々あった。

また、これはもつと最近始まったことだが、学生を連れて、何回か村上春樹『風の歌を聴け』の舞台となっている芦屋界隈を散策したこともある。スタートは打出公園。猿がいなくなつたケージをバックにしながら、主人公の「僕」と「鼠」が車を猛スピードで走らせ、「景気よく公園の垣根を突き破り、つつじの植え込みを踏み倒し、石柱に思い切り」ぶつけたことを想



像してみたが、住宅街のあんな細い道を猛スピードで走れるとはとても思えなかった。まあ、一九七〇年代当時、公園の柵にはまだ猿がいたのだから、道ももしかしてもっと広がったかもしれない。と思いながら、打出公園を後にし、川を下って海に向かっていけば、今回は私たちも、小説中の「僕」が体験したテニスコートの音景や湾の風景とはほとんど変わらない音と景色に出会うことができた（あるいは、その妄想を抱いただけかもしれないが）。

魚崎駅近くにある旧谷崎邸こと倚松庵も数回訪れた。ここでは『細雪』によく出ている「洋間」と二階の和室をそのまま見つけたが、建物自体は神戸新交通六甲アイランド線の橋脚建設のため一九九〇年に移築されているので、周辺の景観は主人公たちが見ていた風景とは違うものになっていた。また、林美美子『放浪記』の一つのエピソードの舞台になっている湊川神社を見に行った時も、境内の「水の涸れた六角型の噴水」は残っていたが、鳩の豆を売る婆やの「豚小屋のような」店はもう影も形もなかったし、春先の散策だったので、強い日差しのせいで「何もかもむき出しにぐんにやり」していることもなかった。今、あるもの・ないものは、時代や季節の移り変わりの産物なのか、あるいはフィクションとリアリティーのズレから生じるものなのかはわからないが、どちらも構わないだろう。

京都でももちろん、いい近代文学散歩ができる。コースは複数可能だが、森鷗外「高瀬舟」、川端康成『古都』、デビット・



ゾペティ『ごちげんやん』と Kyoko Yoshida「Kyoto Panorama Project」の主人公らが（時代錯誤を気にせずに）行き交う川端通り、そして先斗町と木屋町通りを歩き、特に川端が描く祭りと寺社の近代古都（矛盾しない！）と、Yoshidaの未来ディストピアとしての京都を交差させると面白い。都市を囲む山々は前者では昔からある壮大な「借景」だが、後者では「伝統」という頑固な牢屋の壁に化けている。そして『古都』では「祇園祭の本序」である「御興洗い」に使われる川と、「Kyoto Panorama Project」において、魔術をかけられた主人公「Z」が橋から飛び降りて自殺し損ねた川とが、同じ鴨川ではないか！文学散歩中、過去から未来までの時代の「層」が重なり合う地理を歩きながら、不思議な「合成物」が読者兼散歩者の脳裏に生まれるだろう。それらの合成物が蓄積され、読者の個人史を形作っていく。もちろん、これは「文学」散歩に限ったものではない。人文科学研究所の高木博志先生に案内していただいた歴史散歩もそうだ。一つの地を自分の足で踏みしめ、そこに生きた人々（架空であっても構わない）の生活の営みに想いを寄せることで、彼ら・彼女らと結ばれ、共有の「地元」を想像・創造する。

二〇一九年四月から、関東で文学散歩をして行くことになっている。新天地では、「どこから来ましたか？」と聞かれたら、「人文科学研究所から」と答えたらだめだろうか？



講演



夏期公開講座

驚の巢からアガサ・クリステイ を眺めると

宮 紀子

小学生の頃から憧れていた職業がいくつかある。ギリシア・ローマ神話が大好きで、それが投影された夜空を見上げ、夏休みの宿題にビール缶と段ボール箱で作ったプラネタリウムを提出したりしていたのだが、ヴィーゼの『夢を掘り当てた人』を読んで初めて、『イーリアス』の舞台トロイアを発見したハインリ

ヒ・シュリーマンと考古学なる分野を知った。ロマンは、地下にもあったのだ。また、とうじの「道徳」の教材には、郷土の偉人として、鳥居龍蔵が徳島城内の貝塚発見と共に取り上げられていた。かれは契丹の王墓たる慶陵を探查したことで名高く、『遼史』の記述を裏づけ補足する壁画や契丹文字の墓誌を紹介した。この文字の全文は、いまもなお判明していない。数多ある古今東西の推理小説のなかでも、エドガー・アラン・ポーの「黄金虫」やコナン・ドイルの「踊る人形」の暗号解読の場面に夢中になっていた一読者としては、挑戦すべき課題なのだろうが、奈何せん、ヒエログリフを解読したシャンポリオンや突厥文字のトムゼンのような語学力と忍耐を持ち合わせていなかった。考えてみれば、ミステリというジャンル自体、現場の痕跡や遺留物、遺体の状態、目撃者や関係者の証言といった手がかりから、科学と人文知を駆使して事実の断片や動機、背景等を掘り出し、何があったのか復元したり、財宝を発見したりするのだから、考古学や歴史学みたいなものだ。

遺跡発掘の夢は、大学に入ってから潰えることなく、教養部では取えて「地学実験」を受講し、吉田構内を走る4本の断層の計測（人文研本館南側の地層には慶長の大地震の液状化現象の痕が残る）、レーザ

光線を照射する鉱物解析等に精を出していた。が、肝心の考古学教室のガイダンスにおいて、主任教授が出した進学の三条件（①画力②早起き③協調性）のうち二つがクリアできずに断念した。それでも、せめて最終的に選択した中国学に活かそうと、「考古学実習」に参加し、測量、採拓、製図、撮影・現像等の技術をひとつとおり学んだ。以降、興味のある時代・地域の発掘報告に目を通して文献との照合に努めるいっぽう、論文を謎解きに見立て、疾走感や粋なオチを求めているがき続けている。

そんなこんなだから、考古学者のマックス・マローワンと再婚して中東を舞台にする作品も多いアガサ・クリステイやアメリカの人気ドラマ『Bones 骨は語る』にハマらないわけがない。とくに前者は手がかりの配置、伏線の仕込み等で煮詰まったとき、何かと助けてくれる（気分転換もとい現実逃避ともいえるが）。あまりに繰り返し読むため、やがて本筋と関係ない微細な、とくに「モンゴル時代史」の知識が役に立つ箇所注意が届くようになった。その結果が講演で配布したA4で四十頁にのぼるレジュメである。

アガサの作品の時代背景、人物設定、調度品の多くは、かのじよが実際に経験、見聞きし、親しんでいたもので、おそらくは、その描写のリアリティこそ、最

新もしくは記憶に新しい時事ネタを取り込みアレンジする手法とともに、人気を博した理由だった。時間の経過によって、それと判り難くなっている場合もあるが、ひとつひとつ例を挙げて証明できる（一九一五年の豪華客船ルシタニア号の沈没をそのまま舞台に使った『秘密機関』にはじまり、核分裂の発見で一九四四年のノーベル化学賞の候補だったリーゼ・マイトナーが『死への旅』のエルザ・マンハイムになったこと等）。

大凡は、岩波書店の『図書』の八一七号（二〇一七年三月）と八四四号（二〇一九年四月）に、「虫眼鏡でアガサ・クリステイを覗いたら」および講演題目そのままを掲げて述べたので、ここでは、考証に利用したアガサの『自伝』に関して若干を述べたい。

まず、アガサは、『もの言えぬ証人』の一節どおり、終始、非常に家名を重んじ、家庭内の問題については完全な沈黙を守る。兄モンティを『招かれざる客』の被害者のモデルにしながら、その麻薬依存症は隠し否定した。かのじよの最初の婚姻は、アーチボルドの浮気によって破綻したが、良家の出であった夫の愛人の名を世間に晒し罰したいがために、自身が演じた、あの有名な失踪劇のことも触れない。

再婚相手のマローワンは、十七歳も年下で、メソポ

タミアのウル遺跡の発掘隊長レナード・ウーリーの助手に過ぎなかったため、反対、忠告する者もいた。じつさい、アガサが記録したかれの言動を辿るだけでも、打算的と思われる仕方のない処がある。

結婚の翌年（一九三二）、かれはウーリー隊から離れ、アッシリアの都ニネヴェを発掘しているキャムベル・トムプスン隊に移った。そこで、エクスカーションと称して、近隣の大遺跡ニムルド（オースティン・ヘンリー・レヤードが最初に発掘。宮殿・神殿跡から切り出された大型の石像、狩猟のレリーフ等は、大英博物館の一階展示室の相当な面積を占拠する）にアガサを連れ出し、この地の再発掘こそが自分の夢なのだと告げた。くだんのシュリーマンがまずは商人となったように、発掘は莫大な資金を必要とする。定職を得ていないマローワンが隊を率いるには、大英博物館等からの資金援助に加え、アガサの印税が必要不可欠だったのだ。とはいえ、いきなり着手するのは無理で、小手調べとしてニネヴェ城外の小墳丘アルパチャに挑む。しかしイラクの政情悪化のため、二年で切り上げ、当面（一九三四―三八）は、対象地をシリアに移し、実績を積むよりほかなかった。

第二次世界大戦の間、アガサは、大英博物館のエジプト・アッシリア部の管理者シドニー・スミス教授や

古代エジプト学のステイーブン・グランヴィルとの交流を絶やさず、夫の就職のために奔走し（『死が最後にやってくる』、『さあ、あなたの暮らしぶりを話して』の執筆もその一環）、一九四七年、マローワンは晴れてロンドン大学の西アジア考古学講座の教授となった。そして、ついに念願の発掘に取り掛かる。その成果たる『ニムルドとその遺物』全三巻は一九六五年に刊行されたが、一九五〇年にニムルドで書き始められたアガサの『自伝』もまた、かれの書と一対であるかのように、同年同月に擲筆されている（アガサの死後に、マローワンの『自伝』と抱き合わせて刊行）。

アガサは、大英博物館やバグダードの博物館に納められたニムルド出土のさまざまな象牙細工の詳細（現物は全て、しかも多くはカラー写真によって、マローワンの数多の著作の中に確認できる）、発見時の興奮を生き活きと語り、ほかならぬ自分がそれらに付着していた泥を極細の編針や歯科医の器具、化粧クリームといった小道具を工夫して洗い落としていたこと、ニネヴェ発掘時代から縮尺製図・出土陶片の接合・写真撮影を担っていたこと、それに纏わる苦勞話を連ねている。夫の仕事への寄与について、強烈な自負心をもっていたことが窺える。

それは恐らく、夫の秘書バーバラ・パーカーへの対抗心がなさしめたことだった。かのじよは、高級婦人服店のマネキン（アガサが短篇「ラジャーのエメラルド」で小馬鹿にしていた職業）から一念発起、マローワンの弟子となりニムルド発掘に参加、アガサの死後すぐに妻の座を継いだ女性である。マローワンは教授になるや、女子学生たちと破目はずしはじめたらしいのだが、アガサは全て黙殺する。いずれ誰かが掘り出すことは、職業柄、人一倍わかっていたろうに、よほど「二度も結婚に失敗した女」と思われたくなかったのか、夫の微笑ましい面だけを見ようとした。ヒトとはまことに哀しい生き物だ。

探検大学のパイオニアたち

——長廣敏雄『雲岡日記』から——

岡村秀典

京都大学は探検大学という異名をもつ。一九三八年十二月に今西錦司らを中心として京都探検地理学会が立ちあげられ、羽田亨総長が会長に擁立されたことにより、大学をあげて探検をバックアップすることになったのである（羽田は京大東洋学の泰斗、のちに東方文化研究所の所長を兼務する）。さかのぼって同年八月には農学部教授の木原均を隊長とする京大内蒙古学術調査隊が派遣されており、その下地は十分に整っていた。また、当研究所の前身である東方文化研究所は、同年四月に東方文化学院から独立すると同時に雲岡石窟（山西省大同）の調査に着手している。それを主導した水野清一と長廣敏雄も京都探検地理学会の創立に参加している。三八年はまさに文理の垣根を越えた探検大学の出発点であり、四四年まで七年におよぶ雲岡石窟の調査や今西らによる四二年の大興安嶺探検など、北中国の組織的な学術調査が活発におこなわれた。戦

後、中国の調査は不可能になったが、新たに発足した当研究所の今西と水野らは、新しい海外調査を摸索するようになった。それが本原や今西らの率いる京大カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊（一九五五年）、水野の率いる京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊（一九五九～一九六七年）である。京大のフィールドは北中国からユーラシアの西へと大きくひろがったのである。

東方文化研究所の調査した雲岡石窟については、一六卷三三冊におよぶ大部の報告書が水野・長廣の連名で一九五〇年代に公開されたが、そこに報告されているのは研究成果のみであり、なぜか調査の経緯はほとんど記されなかった。五千枚にのぼるガラス乾板の写真撮影した羽館易や一千枚近い拓本を採った徐立信（北京琉璃廠）、実測図の作成者は各巻の凡例や目次に記されているものの、それ以外の参加者は名前すらわからないのである（当研究所に保管されている水野の調査日誌によれば、参加者は計二三人である）。日本では前例のない長期の海外調査であっただけに、学術史上いささか残念なことであった。そのなかで長廣が当研究所の退職後に『雲岡日記 大戦中の仏教石窟調査』（NHKブックス、一九七八年）として手記を公表したのは、調査の経緯と時代背景をうかがう資料と

したいへん貴重である。雲岡石窟研究院の王雁卿さんはその訳書を二〇〇八年に刊行し、中国では学術的にも高く評価されている。

そこでは一九三六年に水野・長廣・徐の三人が響堂山石窟（河北省邯鄲）と龍門石窟（河南省洛陽）を短期間調査し、雲岡調査に向けた予行演習になったこと、長廣が関係していた雑誌の同人たちが治安維持法よって検挙され、その巻き添えで三八年の第一回調査に参加できなかったことが前史として赤裸に語られる。三九年の調査には遅れて出発できたものの、北京から張家口に向かう鉄道が大雨で流され、八達嶺の手前まで二〇キロを徒歩で向かったこと、日本軍に徴用された民衆が鉄道の復旧仕事にあたっていたこと、ようやく辿り着いた大同では日本人向けの喫茶店でビールを飲んだが、帯剣の若い将校がチャイコフスキーの「悲愴交響曲」をレコードで静かに聞いていたこと、つまり大同は日本軍の占領下にあつて表向き平穏だったことなどが、淡々と記されている。

一方、水野は寄付金を集めるのに奔走した。時局の要請を拒否して独立した東方文化研究所には、自前の資金があるはずもなかったからである。その最大の支援者が華北交通であった。それは南満州鉄道のグループ会社として設立され、占領地における交通路の整備

のほか、さまざまな広報活動を展開していた（貴志俊彦ほか編『京都大学人文科学研究所蔵 華北交通写真資料集成』国書刊行会、二〇一六年を参照）。また、日本軍の協力もえた。三九年には日本の軍用機に乗り、雲岡石窟や方山などの遺跡を空から撮影した。これは英国の考古学者クロフォードが第一次大戦の経験をもたえて開発した新しい調査法であるが、水野はそれをいち早く中国調査に導入したのである。中国では地形図や航空写真の公表が制限されている今日、このときの写真は石窟の立地を考える上できわめて重要な学術資源になっている。

四四年に今西錦司は張家口に設置された西北研究所の所長に就任した。それは日本政府の外郭団体が設立した研究所で、今西は大興安嶺につづく探検を計画し、京大院生の梅棹忠夫が囑託として在籍していた。ここには東方文化研究所から藤枝晃が出向していたこともあり、長廣は大同への行き帰りに立ち寄っている。戦後、かれらは人文研の所員として結集し、今西と水野を中心に京大の海外調査が本格的に切り開かれてゆくのである。





講演会
ポスターギャラリー
二〇一八

四月

2018 KYOTO LECTURES
Tuesday, April 17th, 18:00h
Vyjayanthi Ratanam Selinger
SPEAKER

War without Blood?
The Literary Use of a Taboo Fluid in the *Waka monogatari*

The general *ubimono* of the *Waka monogatari* is a complex one, involving not only the *ubimono* itself, but also the *ubimono* as a literary device. The *ubimono* is a literary device, and it is a literary device that is used to create a sense of mystery and intrigue. The *ubimono* is a literary device that is used to create a sense of mystery and intrigue. The *ubimono* is a literary device that is used to create a sense of mystery and intrigue.

Program note for the lecture will be held at the Kyoto center of the Kyoto University of Education.

Book: *Waka monogatari* (1971)
Publisher: Shogakukan, Tokyo, 1971. 210 pages.
ISBN: 4-02-25000-0. Price: ¥1,200 (hardcover).
ISBN: 4-02-25000-1. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-2. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-3. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-4. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-5. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-6. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-7. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-8. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-9. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-0. Price: ¥600 (paperback).

五月

2018 KYOTO LECTURES
Tuesday, April 17th, 18:00h
Vyjayanthi Ratanam Selinger
SPEAKER

War without Blood?
The Literary Use of a Taboo Fluid in the *Waka monogatari*

The general *ubimono* of the *Waka monogatari* is a complex one, involving not only the *ubimono* itself, but also the *ubimono* as a literary device. The *ubimono* is a literary device, and it is a literary device that is used to create a sense of mystery and intrigue. The *ubimono* is a literary device that is used to create a sense of mystery and intrigue. The *ubimono* is a literary device that is used to create a sense of mystery and intrigue.

Program note for the lecture will be held at the Kyoto center of the Kyoto University of Education.

Book: *Waka monogatari* (1971)
Publisher: Shogakukan, Tokyo, 1971. 210 pages.
ISBN: 4-02-25000-0. Price: ¥1,200 (hardcover).
ISBN: 4-02-25000-1. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-2. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-3. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-4. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-5. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-6. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-7. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-8. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-9. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 4-02-25000-0. Price: ¥600 (paperback).

六月

2018 KYOTO LECTURES
Monday, June 4th, 18:00h
David Lurie
SPEAKER

Dead Goddesses and Living Narratives
Variant Accounts in Early Japanese Mythology

David Lurie is Associate Professor of Japanese Literature and Culture at Columbia University. He has published several books on Japanese literature and culture, including *The Japanese Novel: A History* (2005) and *The Japanese Novel: A History* (2005). He is also the author of *The Japanese Novel: A History* (2005) and *The Japanese Novel: A History* (2005).

Program note for the lecture will be held at the Kyoto center of the Kyoto University of Education.

Book: *The Japanese Novel: A History* (2005)
Publisher: Columbia University Press, 2005. 210 pages.
ISBN: 0-231-13000-0. Price: ¥1,200 (hardcover).
ISBN: 0-231-13000-1. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-2. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-3. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-4. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-5. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-6. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-7. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-8. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-9. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-0. Price: ¥600 (paperback).



2018 KYOTO LECTURES
Monday, June 4th, 18:00h
David Lurie
SPEAKER

Dead Goddesses and Living Narratives
Variant Accounts in Early Japanese Mythology

David Lurie is Associate Professor of Japanese Literature and Culture at Columbia University. He has published several books on Japanese literature and culture, including *The Japanese Novel: A History* (2005) and *The Japanese Novel: A History* (2005). He is also the author of *The Japanese Novel: A History* (2005) and *The Japanese Novel: A History* (2005).

Program note for the lecture will be held at the Kyoto center of the Kyoto University of Education.


Book: *The Japanese Novel: A History* (2005)
Publisher: Columbia University Press, 2005. 210 pages.
ISBN: 0-231-13000-0. Price: ¥1,200 (hardcover).
ISBN: 0-231-13000-1. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-2. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-3. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-4. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-5. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-6. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-7. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-8. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-9. Price: ¥600 (paperback).
ISBN: 0-231-13000-0. Price: ¥600 (paperback).

Kyoto University of Education, Kyoto University of Education, Kyoto University of Education, Kyoto University of Education, Kyoto University of Education

SPECIAL LECTURE

Essay on History of Cudic Images in China
The Domestic Statuary of Human


Alain ARRAULT
Kyoto University of Education, Kyoto University of Education





June 26, 2018 18:00-19:30

Kyoto University of Education, Kyoto University of Education, Kyoto University of Education, Kyoto University of Education, Kyoto University of Education

京都大学教育史学研究会 第10回 京都大学教育史学研究会 第10回







日本アンダーアーツ・東京芸術大学音楽学部
レガト・ウイング・ミュージック

20世紀が 変奏した 18世紀

「変奏曲」
の魅力を
再発見する

2018.6.23(土) 17:00-18:00/7大会場
於「京都大学人文科学研究所 4F大会議室」

- 1. 変奏曲の歴史と変奏曲の分類
- 2. 変奏曲の演奏と聴き方
- 3. 変奏曲の作曲と演奏
- 4. 変奏曲の演奏と聴き方
- 5. 変奏曲の作曲と演奏
- 6. 変奏曲の演奏と聴き方
- 7. 変奏曲の作曲と演奏
- 8. 変奏曲の演奏と聴き方
- 9. 変奏曲の作曲と演奏
- 10. 変奏曲の演奏と聴き方

主催：日本アンダーアーツ・東京芸術大学音楽学部
後援：京都大学人文科学研究所
協賛：京都大学音楽部
協賛：京都大学音楽部

「音楽のリミット」
「音楽のリミット」
「音楽のリミット」

「音楽のリミット」
「音楽のリミット」
「音楽のリミット」

人間学アカデミー・10月16日(土)に開催されるセミナー

液状化する親密圏

「親密圏」とは、自分と最も近い関係にある人々の集まりを指す。かつては、家族や友人、恋人など、限られた人々で構成されていた。しかし、現代社会では、インターネットやSNSの普及により、親密圏の範囲が急速に拡大し、液状化している。この変化は、私たちの生活にどのような影響を及ぼしているのか、そして、この変化をどう捉えるべきなのか、について、本セミナーでは、最新の研究結果を基に、詳しく解説する。

京都大学東洋オフィス
〒606-8501 京都府京都市左京区豊中 1-1-1
新大丸ビルディング10F

6/16(土) 10:00~12:00
6/17(日) 10:00~12:00

6/23(土) 10:00~12:00
6/24(日) 10:00~12:00

7/7(土) 10:00~12:00
7/8(日) 10:00~12:00

7/14(土) 10:00~12:00
7/15(日) 10:00~12:00

6/16(土) 13:00~15:00
6/17(日) 13:00~15:00

6/23(土) 13:00~15:00
6/24(日) 13:00~15:00

7/7(土) 13:00~15:00
7/8(日) 13:00~15:00

7/14(土) 13:00~15:00
7/15(日) 13:00~15:00

6/16(土) 16:00~18:00
6/17(日) 16:00~18:00

6/23(土) 16:00~18:00
6/24(日) 16:00~18:00

7/7(土) 16:00~18:00
7/8(日) 16:00~18:00

7/14(土) 16:00~18:00
7/15(日) 16:00~18:00

6/16(土) 19:00~21:00
6/17(日) 19:00~21:00

6/23(土) 19:00~21:00
6/24(日) 19:00~21:00

7/7(土) 19:00~21:00
7/8(日) 19:00~21:00

7/14(土) 19:00~21:00
7/15(日) 19:00~21:00

6/16(土) 22:00~24:00
6/17(日) 22:00~24:00

6/23(土) 22:00~24:00
6/24(日) 22:00~24:00

7/7(土) 22:00~24:00
7/8(日) 22:00~24:00

7/14(土) 22:00~24:00
7/15(日) 22:00~24:00

**日本・ルーマニア・ドイツ・
Socialist Cultures in Japan,
中国・ソ連における
Romania, Germany, China,
社会主義と文化交流の
and the Soviet Union:
ネットワーク:
Connecting the Dots
文学、舞台演劇、映画**

【講師】
梅田：田村容子、ヤコブ・ヴィリアム、和田京
コメダ：三川由紀子、高木正樹
ホセ：バウチ・ロマン・ネルカ・リナ

2018年7月21日(土) 13:30-18:00
京都大学人文科学館、セミナー室1

1. 梅田：社会主義と文学の交差点「The Dots」の形成と発展
2. コメダ：中国の社会主義文学と映画の発展
3. ホセ：ルーマニアの社会主義文学と映画の発展

入場料不要
参加無料

入場券の購入は不要です

[illegible][illegible]

京都大学人文科学研究所
**高校生のための
 夏期セミナー**
 人文科学研究への招待―「生きる」を考える―
2018年8月18日(土)

対象：高校生 定員：60名
 会場：京都大学人文科学研究所・本館
 (本部キャンパス・総合研究4号館)
 1階 セミナー室1

事前申し込み不要・先着順・参加費無料

10:30-11:30 高橋悠紀彦 先生 人文学部総合研究4号館
 「現代アートの時代―文化の一端から文化を語る―」

2:30-3:30 西村千太郎 先生 文学部文学科
 「『おひさし』の物語―「生きる」をどう考えるか―」

※参加費0円～1500円程度、それぞれで参加可
 ※参加希望者は必ず事前申し込み・参加料・申し込み



※申し込みは「京都大学人文科学研究所」のホームページから
 京都大学人文科学研究所 総合研究4号館 1階 セミナー室1
 京都大学総合研究4号館 1階 セミナー室1



GRADUATE SCHOOL OF SCIENCE AND TECHNOLOGY
KYOTO UNIVERSITY



CENTER FOR GLOBAL EDUCATION
KYOTO UNIVERSITY



GRADUATE SCHOOL OF SCIENCE
KYOTO UNIVERSITY



LECTURES

Monday, July 23rd, 18:00h

Lawrence E. Marcoux

Anomalies in *Aesop*

Extrapneup Episodes in the Japanese Script Editions of *Isoopa monogatari*

SPEAKER

Dr. Lawrence E. Marcoux is a Professor and published author at the University of North Carolina at Charlotte. He has published numerous articles on the Japanese language and literature, and is the author of the book *The Japanese Language and Literature*. He is also the author of the book *The Japanese Language and Literature*.





Program and Abstract Information for the Day of the Symposium

July 23rd, 18:00h - 19:00h: Registration and Welcome Reception
July 23rd, 19:00h - 20:00h: Dinner and Entertainment
July 24th, 9:00h - 10:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 10:00h - 11:00h: Breakfast and Entertainment
July 24th, 11:00h - 12:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 12:00h - 13:00h: Lunch and Entertainment
July 24th, 13:00h - 14:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 14:00h - 15:00h: Breakfast and Entertainment
July 24th, 15:00h - 16:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 16:00h - 17:00h: Dinner and Entertainment
July 24th, 17:00h - 18:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 18:00h - 19:00h: Dinner and Entertainment
July 24th, 19:00h - 20:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 20:00h - 21:00h: Dinner and Entertainment
July 24th, 21:00h - 22:00h: Registration and Welcome Reception
July 24th, 22:00h - 23:00h: Dinner and Entertainment
July 24th, 23:00h - 24:00h: Registration and Welcome Reception

2018 KYOTO LECTURES
Thursday, October 11th, 18:00h

Kerstin Pannhorst
Boxes of Fleas and Butterfly Folding Fans
Collecting Insects in Colonial Taiwan

SPEAKER
This talk will explore the history of insect collecting and the role of insects in the construction of colonial identity in Taiwan. It will focus on the work of Kerstin Pannhorst, who has been collecting insects in Taiwan since 2005. She will discuss her experiences and the challenges she has faced in her work.

10/11 (Thu) 18:00-20:00
京都大学 文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 10/10(水) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

ブラマニズムとヒンドウイズム
インドの哲学と学問

10/7(日) 18:00
京都大学 文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 10/6(土) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

十月

New Visibilities and Invisibilities:
emergent and divergent modes of racism and racialization
Part II

Date: 2018. 9. 29 Time: 13:30~17:00
Place: Room 101, 1st floor Institute of Research in Humanities, Kyoto University
(No reservation required | attendance welcome)

Lecturer
Faye V. Harrison (University of Illinois)
John G. Russell (City University)
Stephen A. Small (University of California, Berkeley)

Co-moderator: Yu Tokunaga (Kyoto University)
Moderator: Yasuko Takekawa (Kyoto University)

10/12 (Sat) 17:30-20:00
京都大学文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 10/11(金) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

2018 KYOTO LECTURES
Tuesday, November 6th, 18:00h

Andrea Gjelai
Monkey Business
Differing Approaches to the 'Reconstruction' of the Ryugasaki Piece Samkoku

SPEAKER
This talk will explore the history of the 'Reconstruction' of the Ryugasaki Piece Samkoku. It will focus on the work of Andrea Gjelai, who has been working on this project since 2010. She will discuss her experiences and the challenges she has faced in her work.

11/6 (Tue) 18:00-20:00
京都大学 文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 11/5(月) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

十一月

映画「祇園祭」と京都
10/27(日) 18:00
10/28(月) 18:00
10/29(火) 18:00

京都大学 文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 10/26(土) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

アジアとヨーロッパの被差別民
＜被・被差別と不可視性の歴史＞

日程: 2018. 10. 12 (金) 時間: 17:30~20:00
場所: 京都大学東洋学ファス
定員 50名 参加費 無料
申し込み 10/11(金) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

Redrawing and Straddling Borders
Chinese Muslims in Transnational Fields and Multilingual Literatures

December 1st
Redrawing Borders between 'Us' and 'Others' in Response to Changing Historical Circumstances

December 2nd
Straddling Spatial, Cultural, or Ethnic Boundaries

12/1 (Sat) 18:00-20:00
12/2 (Sun) 18:00-20:00
京都大学 文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 11/30(金) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

マルグリット・デュラス
声の(幻)前—小説・戯曲・映画

12/14(土) 18:00
京都大学 文学部 101号館 11号講義室
定員 50名 参加費 無料
申し込み 12/13(金) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

十二月

博物館と文化財の危機
—その商品化、観光化を考える

日程: 2018年11月17日 (土) 13:00~18:00
場所: 京都大学文学部総合文化研究棟
定員 50名 参加費 無料
申し込み 11/16(金) 18:00まで
申し込み先 京都大学 文学部 101号館 11号講義室
TEL: 075-753-4111 FAX: 075-753-4112
E-mail: kyo-u-kyo@kyoto-u.ac.jp

International Workshop
Towards the Comprehensive Image Database
on Samian Buddhist Site

京都大学人文科学研究所
（京大）「人文・社会科学の未来形の創造」プロジェクト
開催地 京都大学文学部研究科一階セミナー室1（京大）（京大）（京大）

2019年3月1日（金）開演
13:00

Archaeological Missions of Kyoto University and Samian
Buddhist Site (Kyoto University)

Discovering the Past and Documenting for the Future
The Story of an International Collaboration
Session: Workshop (Towards of Future Research Interest)

Opportunities and Challenges on Economic Development through
Mineral Education and Cultural Property Preservation
In Mar Aynak, Afghanistan
Masanori NAKAGAKI (UNESCO)

CHDS and the Himalayan Archives Vienna: A Brief Historical
and Technical Overview with Insights into Ongoing Development
Yasuno WADANO & Jürgen SCHÖFFELINGER (CHDS, University of Vienna)

2019年3月2日（土）開演
（問い合わせ先）京都大学文学部研究科国際学研究室（075-753-6968）

三月

《田中雅一教授 退職記念講演会》
私流文化人類学における
ヘウレーカ、現代思想、不在のイマゴ

2/22（金）15:00~17:00
京都大学 益川ホール（北山総合教育研究棟1期）

第一部 講演
田中雅一（京大文学部研究科）
第二部 田中先生を囲む人々の懇話会
田中先生（京大文学部） 田中先生（京大文学部）
田中先生（京大文学部） 田中先生（京大文学部）

二月

2018 KYOTO LECTURES
Tuesday, December 4th, 18:00h

Keller Kimbrough SPEAKER
Pushing
Filial Piety
The Otogizoshi Ajikawo
and an Osaka Publisher's
Beneficial Books
for Women

From the late Edo period to the early Meiji period, the Japanese government and the private sector worked together to create a new national identity. This was done through the promotion of Confucianism, which was seen as a moral and ethical foundation for the nation. The Otogizoshi Ajikawo, a series of books published by the Osaka publisher Ajikawa, played a significant role in this process. These books, which were written by women, provided a new perspective on Confucianism and its role in society. They also provided a platform for women to express their views on the world around them. The Otogizoshi Ajikawo was a landmark publication in the history of Japanese literature and culture. It was a testament to the power of women's voices and the importance of education in the development of a nation.

プラマニズムとヒンドウイズム
南アジアの社会と宗教の連続性への再検証

古代・中世インドの
王権と宗教

2019年3月23日（土）24日（日）
東京大学 本郷キャンパス
文学部 2019年 215号

山
概念と
仙術
延年益寿のアルケミー
（新刊）にみる仙術のなほし
飛行する仙人
（新刊）にみる仙術のなほし
飛行する仙人

2019年3月11日（月）開演
会場 早稲田大学 早稲田大学 早稲田大学

2018 KYOTO LECTURES
Thursday, March 7th, 18:00h

Francesco Campagna SPEAKER
The Japanese
Uses of
European
Renaissance
Regeneration
and Reconstruction
in the Modern Period

From the late Edo period to the early Meiji period, the Japanese government and the private sector worked together to create a new national identity. This was done through the promotion of Confucianism, which was seen as a moral and ethical foundation for the nation. The Japanese government also promoted the European Renaissance, which was seen as a model of modernity and progress. The Japanese government used the European Renaissance to create a new national identity and to modernize the country. The Japanese government also used the European Renaissance to create a new national identity and to modernize the country. The Japanese government also used the European Renaissance to create a new national identity and to modernize the country.



彙報 二〇一八年四月より二〇一九年三月まで

おくりもの

- 。宮紀子助教は二〇一七年度日本学術振興会特別研究員審査会専門委員（書面担当）表彰を受賞（二〇一八年七月三一日）
- 。宮紀子助教は二〇一八年バジュ・ブック・アワードを受賞（二〇一八年九月十五日）
- 。藤原辰史准教授は第十五回日本学術振興会賞を受賞（二〇一九年二月七日）
- 。安岡孝一教授は山下記念研究賞を受賞（二〇一九年三月十五日）

人のうごき

- 。岡村秀典教授（東方学研究所）を附属東アジア人文情報学研究センター長に併任（二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）
- 。石川禎浩教授（東方学研究所）を附属現代中国研究センター長に併任（二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）

日）

- 。稲本泰生准教授は、教授（東方学研究所）に昇任（二〇一八年四月一日付）。
- 。福家崇洋は、准教授（人文学研究所）に採用（二〇一八年四月一日付）。
- 。白須裕之は、助教（東方学研究所）に採用（二〇一八年四月一日付）。
- 。福谷彬は、助教（東方学研究所）に採用（二〇一八年四月一日付）。
- 。森下章司は、客員教授（文化研究創成研究部門、二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）。
- 。NOGUEIRA RAMOS, Martin は、客員准教授（文化研究創成研究部門、二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）。
- 。井狩彌介は、特任教授（二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）。
- 。藤本幸夫は、特任教授（二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）。
- 。VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、特任教授（二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）。

一九年三月三一日）。

- 。田中祐理子助教（人文学研究所）は、辞任（二〇一八年九月三十日付）、白眉センター特定准教授に就任。
- 。KNAUDT, Tim は、准教授（人文学研究所）に採用（二〇一九年三月一日付）

- 。HOLCA, Irina 講師（人文学研究所）は、辞任（二〇一九年三月三一日付）、東京大学大学院総合文化研究科准教授に就任。

- 。小川佐和子助教（人文学研究所）は、辞任（二〇一九年三月三一日付）、北海道大学大学院文学研究院准教授に就任。

- 。田中雅一教授（人文学研究所）は、辞任（二〇一九年三月三一日付）、国際ファッション専門職大学国際ファッション学部教授に就任。

海外での研究活動

- 。稲葉穰教授（東方学研究所）は、二〇一七年九月十三日大阪発、高等研究所（Institute for Advanced Study）において、高等研究所歴史学部門客員研

究員として中世中央アジア史の研究を行い、ニューヨークで開催される学会に出席し研究報告を行い、二〇一八年五月十六日帰国。

。瀬戸口明久准教授（人文学研究部）は、二〇一八年十二月十一日羽田発、ハイデルベルク大学において、TIFO Visiting Professorshipとして講義等を担当し、二〇一九年二月十八日帰国。

招へい研究員

。下 東波 南京大学文学院教授
唐宋詩日本古注本研究

（文化生成研究客員部門）
受入教員 永田准教授
期間 二〇一八年二月一日～
二〇一八年四月三十日

。Teeuwen, Marcus Jacobus オスロ
大学日本学教授
祇園祭の近代と現代

（文化連関研究客員部門）
受入教員 高木教授
期間 二〇一八年二月二十日～
二〇一八年八月二十日

。李 裕群 社会科学学院考古研究所研究

員
北朝石窟寺院研究

（文化生成研究客員部門）
受入教員 稲本教授
期間 二〇一八年五月十日～
二〇一八年八月十日

。Small, Stephen カリフォルニア大学
バークレー校アフリカ系アメリカン
研究学部教授
人種と色のシンボリズムの日米国際
比較

（文化生成研究客員部門）
受入教員 竹沢教授
期間 二〇一八年八月二二日～二〇一
八年十一月三十日

。全 勇勲 韓国学中央研究院副教授
日韓両国における西洋天文学受容の比
較研究

（文化連関研究客員部門）
受入教員 武田教授
期間 二〇一八年八月二七日～
二〇一八年十一月二六日

。焦 建輝 龍門石窟研究院副研究員
日本に所蔵する龍門石窟調査資料の研
究

（文化連関研究客員部門）
受入教員 岡村教授
期間 二〇一八年十一月二七日～
二〇一九年二月二七日

。Duttille Remy Paul Raymond ボル
ドー・モンテニユ大学言語・文明
学部英語圏学科准教授
十八世紀ブリテンにおける晩餐・飲
酒・乾杯

（文化生成研究客員部門）
受入教員 王寺准教授
期間 二〇一八年十二月一日～
二〇一九年三月七日

。Walker, Gavin マギル大学大学院歴
史学部准教授
ポスト六八八年日本の思想的再検討
（文化連関研究客員部門）
受入教員 王寺准教授
期間 二〇一九年三月一日～
二〇一九年五月三十一日

。楊 振紅 南開大学歴史学院教授
出土史料を用いた中国古代法制史の研
究

（文化生成研究客員部門）
受入教員 宮宅准教授

招へい外国人学者

期間 二〇一九年三月八日

二〇一九年六月七日

。彭 劍 華中師範大学中国近代史研究

所副教授

清末制憲問題の研究

受入教員 石川教授

期間 二〇一七年八月三十一日

二〇一八年八月三十日

。朱 騰 中国人民大学法学院副教授

出土文献と秦漢時代の制度史

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一七年九月十五日

二〇一八年九月十四日

。楊 孝鴻 上海財經大学人文学院副教授

授

漢代画像石（磚）の調査と研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一七年九月二十日

二〇一八年九月十九日

。張 璋琦 国立清華大学准教授

環境史の視点から見た食文化の継承と

活用—食文化遺産の保護体制に関する

日台比較について

受入教員 藤原准教授

期間 二〇一七年十一月一日

二〇一八年六月三十日

。漆 麟 西南大学美術学院准教授

日中戦争期のモダニズム美術に関する

日中比較研究

受入教員 石川教授

期間 二〇一七年十一月十五日

二〇一九年十一月十四日

。安 東強 中山大学歴史学系副教授

清朝政府と革命党

受入教員 石川教授

期間 二〇一七年十二月十八日

二〇一八年九月十八日

。王 煒 山西大学歴史文化学院講師

中国古建築・史跡写真資料の調査と研

究

受入教員 向井准教授

期間 二〇一八年一月十五日

二〇一八年七月十五日

。JACQUET, BENOT フランス国立

極東学院准教授

建築文化からみたアジアのフロンティ

アの研究

受入教員 稲葉教授

期間 二〇一八年七月十七日

二〇一九年六月三十日

。宋 丹 湖南大学外国語与国際教育学

院日語系助理教授

日本における『紅樓夢』の翻訳と受容

に関する研究

受入教員 永田准教授

期間 二〇一八年七月二十五日

二〇一九年六月三十日

。VERDON, Noemie ナーランダー大

学講師

六—十一世紀カーピシー・ガンダーラ

地方の宗教・学術・政治史の研究

受入教員 稲葉教授

期間 二〇一八年八月一日

二〇一九年七月三十一日

。玉野井 麻利子 カリフォルニア大学

ロサンゼルス校教授

日本帝国時代の「人道主義」の考察—

人種概念をめぐって

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一八年十月一日

二〇一九年三月三十日

。秦 翠翠 河南理工大学外国語学部講

師

京都における「洛陽」文化の受容

受入教員 岡村教授

期間 二〇一八年十月二二日

二〇一九年十月二二日

。王 剛 西南大学歴史文化学院講師

日本と清末の軍事改革

受入教員 石川教授

期間 二〇一八年十一月二八日

二〇一九年十一月二七日

。陳 偉 武漢大学歴史学院教授

中国秦漢時代の簡牘史料よりみた古代

帝国の実像

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一八年十一月二八日

二〇一九年十二月九日

。李 瑄 四川大学中国俗文化研究所教

授

清初渡日黄檗僧の研究

受入教員 永田准教授

期間 二〇一九年二月一日

二〇二〇年一月三二日

。李 磊 華東師範大学歴史学系副教授

秦漢六朝時代の東アジアにおける政治

構造と天下概念

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一九年二月二八日

二〇二〇年二月二七日

外国人共同研究者

。DE SOUZA, Lyle Francis ロンドン

大学バーベック准講師

海外日系人の文学とディアスポラ・ア

イデンティティ

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一六年九月一日

二〇一九年一月二二日 (継続)

。ERICSON, Kjell David ヲネチカッ

ト大学歴史学部客員研究助手

ミキモトの真珠産業の帝国規模での展

開とその資本主義の特質

受入教員 藤原准教授

期間 二〇一七年七月二日

二〇一八年四月三十日

。李 媛 北海道大学文学研究科専門研

究員

日本古辞書の翻刻階層モデルの構築に

関する人文情報学的研究

受入教員 安岡教授

期間 二〇一七年九月十一日

二〇一九年九月十日

。魏 永康 東北師範大学歴史文化学院

講師

秦漢時代の民族政策と辺境統治

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一七年九月二二日

二〇一九年九月二十日 (継続)

。劉 家幸 中央研究院中国文哲研究所

博士後研究員

日本の漢文小説における仏教世界…江

戸時代から明治初期を中心に

受入教員 永田准教授

期間 二〇一八年一月十八日

二〇一九年一月十七日

。李 子捷 日本学術振興会外国人特別

研究員

中国五〇八世紀の如来蔵思想の根本的

再評価

受入教員 船山教授

期間 二〇一八年四月二十日

二〇一九年四月十九日

。吳 國聖 中央研究院歴史語言研究所

博士後研究人員

十一十三世紀胡語写本と碑文の比較研

究

受入教員 中西准教授

期間 二〇一八年九月十八日～

二〇一八年十一月十六日

。RUSNEAC OBLEA, Silviu Catalin

ハイデルベルク大学 PhD Candidate

date

帝国日本のコメモレイション：戦死者

の現在と過去

期間 二〇一八年十月一日～

受入教員 藤原准教授

。Frisch, Nicholas イェール大学 PhD

Candidate

馮夢龍の出版活動

期間 二〇一八年十二月十三日～

受入教員 Witten 教授

。林 磊 復旦大学歴史学系博士課程

一九三七～一九四五年に日本学者が華

北で実施した考古調査と中国学界へ

の影響

期間 二〇一九年三月二八日～

受入教員 岡村教授

。Caraballo Ricardo

日本の二重国籍者が国籍を放棄するプ

ロセスに関する探究的研究

期間 二〇一九年九月二八日

受入教員 竹沢教授

外国人研究生

。金 英仁

近世京都の庶民生活空間としての門前

町―北野天満宮前町と祇園の比較を

中心に―

期間 二〇一七年四月一日～

受入教員 岩城准教授

。吳 虹

六―七世紀日本における仏教美術遺存

から見た東アジアの文化交流

期間 二〇一七年十月一日～

受入教員 稲本准教授

。趙 曄

近代日本における中国労働者―人口移

動という視点から

期間 二〇一七年十月一日～

受入教員 村上准教授

。王 星

中世中央アジアの言語研究

期間 二〇一八年十月一日～

受入教員 池田教授

。王 星

『莊子』郭象注の研究

期間 二〇一八年三月二一日

受入教員 古勝准教授

。石垣 章子

漢訳仏典として位置付けられた疑偽經

典の成立と思想の系譜

期間 二〇一八年四月一日～

受入教員 船山教授

期間 二〇一七年十月一日～

二〇一八年六月三一日

。Vargha Attila

超境する日系二世アメリカ人のアイデ

ンティティ

期間 二〇一八年十月一日～

受入教員 竹沢教授

。日動

二〇二〇年三月三一日

。郭象注の研究

期間 二〇一八年三月一日～

受入教員 古勝准教授

。石垣 章子

漢訳仏典として位置付けられた疑偽經

典の成立と思想の系譜

期間 二〇一八年四月一日～

受入教員 船山教授

。龔 麗坤

中世中央アジアの言語研究

期間 二〇一八年十月一日～

受入教員 池田教授

。王 星

二〇一九年三月三一日

。王 星

二〇一九年三月三一日

六〇八世紀の華北における陶磁器の考古学的研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一八年十月一日～

二〇一九年九月三十日

連携研究者

。渡辺 恭彦

廣松研究を軸にした日本におけるマルクス主義と文明史観の再検討

受入教員 福家准教授

期間 二〇一九年一月一七日～

二〇一九年三月三十一日

。茶園 敏美

売春を中心とする戦後日本のセクシュアリティ

受入教員 石井准教授

期間 二〇一九年一月一七日～

二〇二一年三月三十一日

。沈 恬恬

所有のパラドックス―土地税制改革の視点から考える生という営み―

受入教員 立木准教授

期間 二〇一九年一月一七日～

二〇一九年三月三十一日

東アジア人文情報学研究センター講習会

。二〇一八年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十月一日）

開講挨拶・オリエンテーション

岡村 秀典

漢籍について

永田 知之

カードの取り方―漢籍整理の実践

高井 たかね

第二日（十月二日）

工具書について

福谷 彬

漢籍関連サイトの利用

Wittern, Christian

実習を始めるにあたって 梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月三日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（一）

第四日（十月四日）

和刻本について

（大学院文学研究科教授）

宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月五日）

朝鮮本について

矢木 毅

実習解説

永田 知之

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

岡村 秀典

。二〇一八年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月五日）

開講挨拶・オリエンテーション

岡村 秀典

経部について

古勝 隆一

叢書部について

藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日（十一月六日）

史部について

古松 崇志

漢籍データ入力実習（一）

第三日（十一月七日）

子部について

稲本 泰生

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十一月八日）

集部について

（大学院人間・環境学研究科教授）

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月十日）

漢籍と情報処理 Wintern, Christian

実習解説 永田 知之

情報交換 安岡 孝一

終了挨拶 岡村 秀典

お客さま

。七月二五日 復旦大学 多言語教育セ

ンター副センター長 艾菁 他二十名

（高木、村上、福家が対応した）

。二月八日 圓光大学校総長 朴孟洙

他三名

（高木が対応した）

。二月二三日 アイルランド国立大学ダ

ブリン校教授 Anne Fuchs 他一名

（小関、岡田、藤原、岩城が対応した）

共同研究会の理想の形を求めて

谷川建司（早稲田大学客員教授）

平成二十八年度から三年間、人文科学研究所において「オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築」研究会を班長として主宰させて頂いた。過去にも、国際日本文化研究センターにおける同様の外部教員組織による研究会や、科研費による研究会など、二十名程度の研究者を組織して一定期間研究会を運営してきた経験はあったので、今回はそれらの経験から学んだノウハウを活かして運営してきたつもりだが、うまくいった点だけでなく反省点も多かった。その反省点も含めて、共同研究会の運営に関する筆者の考え方を述べてみたい。

二十名規模の共同研究会を運営していく際に重要だと考えている第一の点は、そのメンバー構成である。

共同研究会というのは何か大きな括りとしての研究分野やテーマが始めから設定されているため、当然ながらその分野・テーマを専門とする、あるいは少なくともそのテーマに深い関心を持つ研究者に声を掛けてメ

ンバーを固めていくことになり、年齢構成や男女比などは意図的にバランスを取るといふよりは自然と決まってくるが多いが、それでも筆者がいつも意識していることがある。それは、研究会の主宰者を中心とする「働き盛り世代」に加えて、まだキャリアの浅い若手世代や院生であっても意欲のある者にはどんどん参加してもらおうことと、一方で「働き盛り世代」よりも年長の、重鎮の研究者に必ず一人は加わってもらおうことである。そして、なるべく異なる研究分野の方を巻き込むことと、狭義のアカデミアのインサイダーだけでなく、ジャーナリズムの領域で仕事をしている人などでも、これはつ、と思う仕事をしている人には声を掛けて加わってもらおうことで、研究会に違った視点やある種の緊張感を導入することである。

「働き盛り世代」は学内行政も多忙な人が多いから出席率が低くなりがちなのは致し方ないところだろうか。

主宰者が教育者として多くの人材を育ててきた場合には、往々にして、若手には弟子筋の研究者を招集して事務局的な仕事をさせ、師匠筋にあたる重鎮の研究者を後ろ盾に据えて、その研究分野における特定の派閥の勉強会に陥ってしまうことがある。筆者も若い頃に飛び込んでみた研究会がそういった内輪の集まりで居心地の悪い思いをしたことがあるが、それでは研究

会の活動自体が学会内の勢力争いのようなポリテイカルな動きになってしまいうし、そもそも研究会の内部にヒエラルキー構造を作ってしまうことになるから、最も戒めるべき形だと思う。

幸い、というか意図的なこととして、筆者は特に誰かの弟子でもなく、日本映像学会や日本映画学会のような組織には加わっていないいわば一匹狼の研究者だし、所属大学での立場も専任から客員教授へと切り替えてミニマムなコミットにしているため、(院生の指導はしているが)教育者として人材を育てる役割は担っていない。従って、メンバーとして声を掛ける際にはあくまでもその個人の研究動向を見て、こういうことに関心をもって研究している人ならばぜひ加わってもらおうと思った誰にでも声を掛けることができる。そして一番大事なことは、研究会の中にヒエラルキー構造を作らずに、院生であっても名誉教授であっても一研究者としてはあくまでも対等な関係で自由に意見をいい、互いを批判できるような雰囲気を作っていくことだと考えている。

勿論、若手研究者が、当該研究分野における必須文献を著したような重鎮の研究者に対して批判的コメントをするのは現実的には難しいかもしれないし、対等な関係と言っても礼儀をわきまえて接することが必要

なのは言うまでもない。だが、筆者自身の経験からみても、ご専門分野は様々だがそれぞれに著名な先生方、例えば竹前栄治先生、袖井林二郎先生、鶴見俊輔先生、香内三郎先生らと若い頃に研究会で意見を交わさせて頂く経験をしてきたことが、どれほど自身の血となり肉となっているか考え併せれば、今の若い世代の研究者たちにもそういう機会を提供していくことが重要なことは論を待たない。

本研究会には、東宝争議についての名著『文化と闘争』を著された立教大学名誉教授の井上雅雄先生にメンバーになって頂いた。ひとしきり議論が交わされた後で満を持して発言される井上先生のコメントはいつも鋭く、厳しい指摘であることも少なくなかったが、それは取りも直さず同じ土俵で一研究者として加わって頂いていたからに外ならず、温かく面倒見の良いそのお人柄も含めて、研究会にとつての大久保彦左衛門的な愛すべき意見番という存在だった。お酒を召し上がらないにも拘らず、いつも研究会後の懇親会にも付き合って頂いた井上先生だが、先生がホテルの部屋に引き上げられた後でまだ飲み続けたたりしていると、いつも「いやあ、今日も井上節炸裂だったねえ!」などと語り合い、その日の研究会での先生のコメントを咀嚼したものである。

その井上雅雄先生はしかし、研究会二年目に病を得て出席が叶わなくなり、三年目の最終研究会にて「短いお付き合いでしたが楽しい日々でした。いつかまた天国でお会いできればまた一緒に研究をしたいと思っています。ありがとうございます」とのコメントをメンバーに残し、その五日後に亡くなられた。メンバー一人一人の心に大きな財産を遺して。

「若手」が手を挙げるとき

村上 衛

私の小学生のころ、授業中に先生の質問をうけると、児童、特に男子は一斉に手を挙げて答えたがった。私などは手を挙げるのが面倒だったので、指名されるまでじっとしていたが、そういった消極的な児童も適切に指名しないといけないから、学校の先生はたいへんである。もつとも、積極的だった児童も、中学生、高校生になると、すっかりおとなしくなってしまう。大學生になると、単純な解答を聞くようなことではなく、

こちらが講義中に聞いていて分からなかったことがないか聞くような形になるので、条件は違うが、学生はまず手を挙げない。受講者が百人以上の大人数なら仕方ないが、十数人程度でも駄目である。大体仕方なく講義の終わりに質問を書かせるといった面倒なことをしないといけない。書かれた質問を見て、講義が理解されていないことを改めて確認することも多い。大学院生になっても受け身の姿勢は基本的に変わらない。

ところが、日本以外の国の学生になると、こんな大人しくはない。欧米圏のセミナーでは、報告終了後に質問が殺到する。教員だけではなく、ポスドクや大学院生も全く遠慮していない。質問をすることで、自らの疑問を解消するだけではなく、自分のアピールもさりげなく行っている。こうした質問をすることが文化になっているところであると、質問の質も問われ、つまらない質問は興ざめである。また、質問をするためには報告を集中して聞いていなくてはならない。報告者が報告中に話したことを聞いたらかなり恥づかしいことになる。また報告をして質問がないと、それは報告がたいへんつまらない、質問の価値もないものということになってしまうからたいへんである。その基準でいくと、私の講義などの価値もずいぶん低くなって

しまうのだが。

さて、本題の研究班である。研究報告型の研究班ではどこも同じであると思うが、私が開催させていただいている班ではまず報告者が一時間半ぐらい報告を行う。午後二時に始めるので、報告が終わるのは大体三時半になっていて、ここで二十分休憩をとる。これは、まず長時間の報告で疲れている報告者の休憩が必要なのもあるが、コメントイーターが質問を伝えて、報告者が回答の準備をする時間にもなる。休憩が終わり、大体四時前から、コメントイーターのコメントということになる。コメントイーターの皆様にはたいへん準備していただくことが多く、場合によっては報告とあわせて二度報告をうかがうという形にもなり、有り難いことである。コメントと報告者の応答で、四時半をまわっていることも多い。その後、班長特権で少し質問・コメントなどをさせていただく。

その後が、質問タイムになる。この際、できるだけ若手から質問してもらうようにしている。日本の学会の場合、みな遠慮して重鎮の質問を待つという形が間々みられたが、研究班で最初にそういった方が質問してしまつと、後の若手が質問しづらくなるので、「Under40ではないが、「年齢制限」を設けてすこし我慢していただいている。

若手の質問は、人それぞれである。レジュメに書かれている細かい事実関係を聞く場合もあるし、内容に踏み込む場合もある。研究班で取り扱う時代は明清時代から現在まで、使用している史料も文字史料から統計の数値まで様々なタイプのものがある。したがって、毎回の報告内容に通じている専門家などありえないので、分野によって得意不得意があることは当たり前である。時として報告者が理解できない質問をする場合もあるが、それを言い直したりするのも訓練だろう。ただ、研究班を主催して何年かたつと、「若手」が従来とは格段に違う、優れた質問をするようになることがある。自分が思いもつかなかったこと、自分の言い足りなかったことを補ってくれるようなもの、いろいろあるが、そうした質問を聞くと、研究班を開催させていただいてよかったと思う。

大体は五時過ぎ、場合によっては五時半すぎまで質疑応答が続く。三時間近く、意識をとばすこともできない報告者は疲労困憊している。もつとも、その後の懇親会でアルコールという燃料を補給すると、熱心に話を続けられる報告者の方も多い。質疑応答が続くなかで、より本音が聞けることもある。もつとも、懇親会の時間が研究班の時間をうまわるほど、燃料の過剰供給が多いのは、自戒したいところである。

四書を学んだコンピュータはセンター試験の漢文を読めるのか

安岡孝一

コンピュータによる言語処理という観点から見ると、古典中国語（漢文）の白文というのは、かなり厄介なシロモノである。単語と単語の間に区切りがない。文と文の間にも区切りがない。漢字がズラズラと切れ目なく並ぶだけ。こんなもの、どうやって読めばいいのか。

共同研究班「東アジア古典文献コーパスの実証研究」では、古典中国語における文法解析の自動化に全力で取り組んでいる。漢文の白文に対し、形態素解析・依存文法解析・直接構成素解析を順におこなうことで、白文の統語構造が解析可能となる（次ページ図）というのが、われわれの見通しである。形態素解析によって、単語切りをおこなうと同時に、各単語の品詞を得る。依存文法解析によって、単語と単語の間の係り受け関係を解析すると同時に、文の切れ目を得る。直接構成素解析によって、各文の統語構造を解析木の形で得る。われわれは、これまでに古典中国語の形態素解析をほぼ完成し、現在は依存文法解析の手法

開発に精力を集中している。その一方、直接構成素解析については、残念ながら、本稿執筆時点（二〇一九年二月）ではアイデアどまりである。

これまでわれわれは、古典中国語の形態素解析に、McCab（以下[M]）という形態素解析エンジンを使ってきた。[M]は、もともとは日本語向けの形態素解析エンジンだったが、言語、辞書、コーパスに依存しない汎用的な設計がなされており、古典中国語への適用も可能である。ただし[M]は、あくまで形態素解析エンジンであり、依存文法解析はおこなえない。これに対し、UDPipe（以下[U]）という形態素・依存文法解析エンジンと、今年になったStanfordNLP（以下[S]）という形態素・依存文法解析エンジンが現れたことから、これらの性能比較をおこなうことにした。[U]は、チェコ語の係り受け解析エンジンが土台となっているが、多言語化をおこなった際に単語切り・文切り・品詞付与の機能が追加され、形態素解析と依存文法解析の両方を兼ね備えたものとなっている。[S]は、英語の品詞付与・係り受け解析エンジンが土台となっており、多言語化を行った際に文切り・単語切りの機能が追加されたものである。

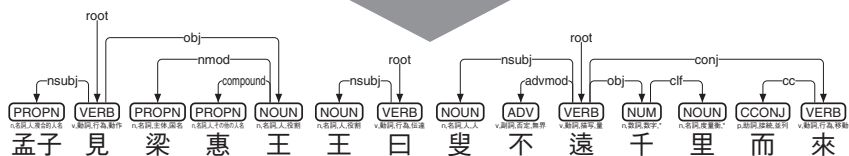
われわれの手元には、四書（孟子・論語・大学・中庸）の形態素コーパスと依存文法コーパスがあり、こ

孟子見梁惠王王曰叟不遠千里而來

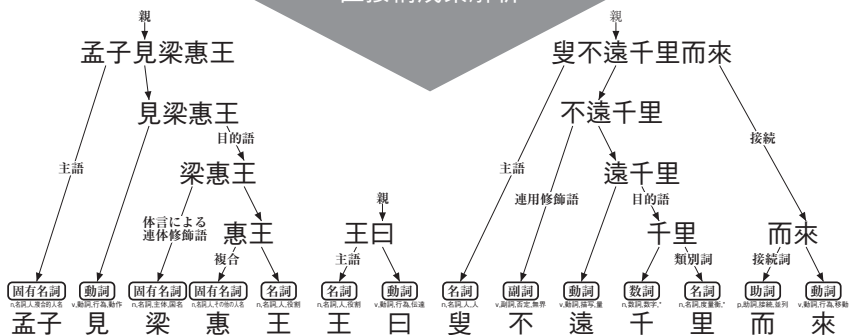
形態素解析



依存文法解析



直接構成素解析



れらを学習用コーパスとして利用できる。そこで[M][U][S]に、それぞれ四書を学習させ、古典中国語の形態素解析・依存文法解析モデルを構成した。このモデルに、四書以外の白文を解析させることで、性能比較をおこなえるわけだ。ただし、[M]の形態素辞書は、四書に出てくる単語（形態素）に加え、大量の固有名詞も収録していることから、それと同じ単語を[U]の外部辞書にも追加した。一方、[S]には外部辞書を接続する方法が（公開されていない）なかったため、[S]に関しては実験条件を揃えきれなかった。

実験対象は、大学入試センター試験『国語』の本試験から、第4問の漢文本文を準備した。評価指標は、MLAS (Morphology-aware Labeled Attachment Score) と呼ばれる百点満点の評価値を用いて、品詞付与と係り受けの正確さを両方同時に評価することとした。ただし、センター漢文は常用漢字で書かれており、われわれの四書コーパスは（いわゆる）康熙字典体で記述していることから、[M]の形態素辞書と[U]の外部辞書に、常用漢字の単語も収録した。これらの準備の後、二〇一九年のセンター漢文を白文化（句読点や返り点などを除去）し、[U]に読ませてみたところ、解析結果の評価値は三九点という、かなり低い結果となった。同じセンター漢文を[S]に読ませてみたところ、

二八点という、やはり低い結果となった。読めていない。[M]+[U]（形態素解析を[M]で、依存文法解析を[U]でおこなう）では三九点、[M]+[S]では三六点だった。どうしてこんなに評価値が低いのか。

各モデルの解析結果を手作業で検討してみたところ、単語切り・品詞付与・係り受け解析・文切りの四つの機能のうち、文切りが極めてダメダメであることが判明した。[U]や[S]の文切りは、機能としては先進的なものの、まだまだ古典中国語には追従しきれていないようなのだ。この仮説を検証するため、白文化の際に句読点を除去せず、文切りを事前に与えるという手法で、単語切り・品詞付与・係り受け解析の評価をおこなってみることにした。そうしたところ、二〇一九年のセンター漢文に対し、[U]は六七点、[S]は三八点、[M]+[U]は六三点、[M]+[S]は五五点となった。文切りを事前に与えることで、いずれも改善が見られ、特に[U]は、まあまあ第点となっている。

二〇一八年以前のセンター漢文に対しても、凸凹はあるものの、ほぼ同様の傾向が見られた。これを裏返して考えると、古典中国語の依存文法解析のうち、文切りの自動化に関しては、まだまだ研究の余地があるということだ。今後のわれわれの研究の進展に期待されたい。

「学際的研究」で損すること、 得すること

竹 沢 泰 子

数年前、アメリカ東海岸のある名門大学で開催された研究セミナーに、一聴衆として参加した時のことである。その日のテーマは「学際的研究」で、壇上に並んだ教授陣がその是非について順番に見解を述べるという企画であった。通常は、一人二人は違った見解を発言するものだが、この日は驚いたことに、四名の登壇者全員が、学際的研究はしない方がいい、と若手研究者に諭すかのように次々と語ったのである。名門大ゆえに学問にも保守的なかと少々違和感を覚えた。

日本の研究機関における共同研究の雛形を創ったといわれる人文科学研究所は、異分野の研究者が集い、互いの専門領域を超えて議論を交わす場として長い歴史を刻んできた。それが人文研の看板である。やや手垢のついた感はあるが、今日流に言うところ「学際的研究」あるいは「分野横断的研究」によって、何がまたられ、一方でどのような困難を伴うのか、私なりの解釈でこの機会に整理してみたいと思う。

冒頭の事例は、個人研究を念頭においた見解であり、共同研究になると話が違う。しかしそれが抱える困難さは、共同研究と無縁というわけでもないだろう。「学際的研究」には華やかなイメージが付きまといがちだが、その蔭で各班長はそれなりの苦勞を強いられている。

専門の異なる研究者同士で前提となるものが異なり、議論が噛み合わないことは当然ながら生じうる。それは織り込み済みだ。それ以外で、研究成果を論文集等で発表する時、学際的研究であるがゆえに「損をする」と毎回のようになってしまう。その一つの例が学会誌の書評である。書評は相手が勝手に企画してくれることもあるが、制度的にこちらが依頼して初めて扱われる学会も存在する。ところが学会誌によっては、執筆者の〇分の△以上が学会員であること、といった規定が設けられており、学会誌以外の学術雑誌であっても、学、あるいは地域研究だけではないので、という理由で除外される場合もある。もちろん学際的研究を誇る学会に加入すればいいのだが、得てして歴史が浅く、また学際的研究の方向性自体も少し異なる気がして、私の場合、これまで躊躇してきたという経緯がある。同様に、単一会学会内での評価に関しても、二、三のディシプリンにとどまる場合と、より広範囲

な学際的研究に取り組む場合とでは、評価の強弱も異なるだろう。

また単著や共著の成果を国際学術雑誌で発表したい時も、学際的研究であるがゆえに、その査読で苦勞する場合がある。ハードル以前に、そもそもゴールへとつながる入口を見つけ出すこと自体が容易ではない。たとえば問題設定や理論的貢獻が文化人類学や社会学にあり、自身が歴史学的研究であれば、歴史学の雑誌では一次資料を使っていないという理由で、人類学や社会学の雑誌では現代を直接扱っていないという理由で、雑誌の性格に合わないとみなされがちだ。これが既存のディシプリンや地域研究内に収まる内容であればまったく違う話ではないだろうか。

しかしこうした軽くはないハンディを抱えながらも、学際的研究に対してそれなりの評価が定着しているのは、それを越える「得すること」があるからだろう。その一番の醍醐味は、ディシプリンの融合や連携から新しい学問や研究テーマが拓かれることにあるのではないか。

たとえば、人種研では、被差別部落も日本において人種化されてきた集団の一つであると定義して積極的に扱ってきた。この間の過程において、人種表象で論文集を編んだ際には、近代部落史の研究者が映画『橋

のない川』での部落表象を取り上げ、歴史資料を追いながら、それが招いた論争とその時代的社会的背景を丹念に読み解いた。それに触発された映画研究者が、可視性と不可視性をテーマとした次の論文集において、初めて被差別部落の映画に挑んだ。『破壊』や『橋のない川』における監督や俳優の立場性、^{ポジション}「見えない人種」の表象ゆえの困難さなど、新しい視点がその論考によってもたらされた。また社会運動が元来の専門家だった別の部落史研究家は、人種研の科学史や自然人類学者らとの対話も参考にして、被差別部落に対する優生学的性質を帯びた社会事業について論文を寄稿してくれた。いずれもそれまでの部落史研究や映画研究、科学史研究には存在しなかった新しい成果である。

昨年一二月に開催した日系ディアスポラ・アートに関する国際シンポジウムにおいても、アートとトランスナショナルリズム研究や移民研究の出会いによって新鮮で先端的な議論が誕生した。「マイナー・トランスナショナルリズム」という国民国家をまたぐ越境移民たち同士のあるいは他のマイノリティとのヨコの関係性を、主流派集団と少数派集団というタテの関係性よりも重視するこの新しい概念をアートに当てはめた場合、何が見えるかを日・米・伯（沖縄系・韓国系を含む）の研究者らで論じ合った。あるコメンテーターによる

と、美術史ではこれまでまったく扱われてこなかったテーマだという。日系移民のアーティストたちが、移住先で先住民やアフリカ系、他のアジア系移民や南米系移民たちと遭遇したことで、どのような新しいアートを創造したのか、概念を援用させることで先鋭化して浮かび上がったように思う。

こうして研究班のなかの多種多様なプロジェクトをお世話する私は、学際的研究によって、さまざまな学問の旅をさせてもらっている。すべてに通底する根源的な問いは、人間の分類をめぐるものであり、それは文化人類学の真髄だと思っている。非力の私には到底手に追えない問いではあるが、それでも旅先々での出会いから、新しい旅路の発見につながる活力を得ている。



ゼロから始める人文学

白 須 裕 之

世の中には「ゼロから始める」「ゼロから学ぶ」といった表題の本が溢れている。この小文も表題からすると、何か人文学への入門を初学者に分かりやすく説明するような、そういったものを想像されるかもしれないが、人文学の素人である筆者にそのようなものが書けるはずもない。と言って、それでは初学者である自分が人文学をどのように勉強しているか、その勉強法を紹介しようという訳でもない。「ゼロから始める」とは、まさしくゼロそのもの、小学校のときに算数で学び、今でも日常生活で使っている、あのゼロ0という記号がどのような働きをしているかということから、人文学について眺めてみようというのである。

ゼロという記号は何かしら、人々の関心を惹き付けるものがあるようだ。素朴に考えると、何もないこと、無といったものを表現するという、存在しないものを指し示すという逆説的な働きに魅力を感じるのではないだろうか。そんなゼロという記号について少し考え

てみよう。但し、ゼロが数学に導入された経緯についての歴史を扱うという訳ではない。

数について楽しく読める算数読本『数の悪魔』にも最初に1と0の話が登場する。数えるという行為、数を思い描くことが「単位」の繰返しによる複数を表現する最初の数記号1、II、III、…を生む。この時点では数は「単位」を抽象化しているが、数記号が対象を指示していることに変わりはない。これは「単位」が増えてI、X、C等を使用するローマ数字でも、記号が本質的に何か対象を表現していることに変わったところはない。

それではゼロ0という記号を使用した、我々に最も親しみのあるアラビア数字の数表記ではどうだろうか？ 数学的な記号0は何かの対象を表わしている訳ではなく、他の数学的な記号1、2、3、…の不在を示し、記号体系内での他の記号との関わりから初めて意味作用を獲得する。これは記号が対象としての「モノ」を表わしているという、「モノ」の優先性への拘りから我々を開放し、記号体系より先に何か「モノ」が存在していて、記号はそれを指し示すだけという書記言語の性質についての謬見、「モノ」という始源がないということを教えてくれる。また、ゼロの導入は数えるという行為による算盤のような身体的な媒体か

ら、数表記という書記的な媒体への変化をもたらす。

ゼロの導入は表記のための媒体変化を引き起こすのだ。

これまで述べたゼロという記号の意味作用について、『ゼロの記号論』では数学、絵画、貨幣といった社会的、文化的に異なる記号体系に、同じような構造上の同一性、相似パターンがあることを述べる。文献の電子化についても同様なことが言えるであろう。文献の電子化は研究を便利にしてくれる道具というだけでなく、ゼロが数体系で果たした役割と同じく、前もって与えられている対象を表現しているのではなく、電子化によって構成された記号体系の中で、記号どうしの関係が意味作用を創出するのである。さて、ここまで、表題にある「人文学」について何も語っていないが、小文では致し方ない。文字通り、「ゼロから始める人文学」の全体は筆者の今後の研究を見て頂くしかない。しかし、そうは言っても人文学について何も書かないのは、表題からして片手落ちであろう。そこで少しだけ筆者の人文学に対する姿勢を補足として加えておこう。筆者はつい最近、『目録学の誕生』という本に出会った。終章で『莊子』天道篇を引き、「書物は聖人が遺した糟粕なのか」という問いを提出して本を閉じている。「聖人の死」こそゼロへの思考が教えてくれる始源の不在、「モノ」の先行性の喪失を述べたも

のであり、言葉が既存の対象を表現しているという謬見の表現でもある。書物はたえず書かれ続けねばならないのである。そして古代と異なり、我々は言葉以外の様々な形式的表現をもっている。更に、新たにそれを作り出すことさえできるのである。古代の人々がゼロを発明したように。

参考文献

- [1] 古勝隆一：『目録学の誕生 劉向が生んだ書物文化』京大人文研東方学叢書六、臨川書店、二〇一九年
- [2] H. M. Enzensberger：『数の悪魔―算数・数学が楽しくなる12夜』晶文社、二〇〇〇年
- [3] B. Rotman：『Signifying Nothing―The Semiotics of Zero』Macmillan Press, 1987. 邦訳 西野嘉章訳『ゼロの記号論―無が意味するもの』岩波書店、一九九一年

歴史家の黄昏時

福 家 崇 洋

分不相応ながら、映画の感想を少し書いてみたい。

二〇一六年公開の映画『君の名は。』である。物語は、東京の高校生立花瀧と飛驒の高校生宮水三葉の「入れ替わり」からはじまる。通常は起こりえない入れ替わりによるドタバタ劇が映画の前半部分になる。当然、瀧は「女子力」が高くなり、三葉はやんちゃな振る舞いで周囲を戸惑わせるが、入れ替わりを通して同い年の二人は心を通わせていく（以下ネタバレ注意！）。

映画にはもうひとつのテーマがある。念頭にあるのは二〇一一年の東日本大震災である。宮水家は糸守町にある宮水神社の神主を代々つとめ、一二〇〇年周期で訪れる彗星落下から地域の人々を救う使命を背負っている。しかし、長い年月をへて儀式しか残っておらず、三葉も使命を自覚しているわけではない。一見、不自然な入れ替わりは、このカストロフをいかに回避できるのかという重い問いと関わっている。

映画では入れ替わりに目が引かれるが、物語の要は瀧と三葉が出会うシーンである。それゆえ、二人の出会いはずべて物語の最後に配置されている。一度目の出会いは、入れ替わりが始まってからほぼひと月後の二〇一三年一〇月三日で、三葉が東京の瀧に会いに行ったときである。夕方、電車にいた瀧を三葉が偶然見つけて声をかけるが、お前だれと言われてしまう。実は、入れ替わりには三年の時間差（二〇一三年時の三葉と

二〇一六年時の瀧）があり、中学生の瀧は三葉を知らず、三葉もそのことに気付いていない。しかし、別れ際に瀧は三葉に名を問い、三葉は名前を答えながら髪留めとして使っていた組紐を渡した。組紐は三葉が住む糸守町に伝わる伝統工芸で、映画では「むすび」という時空を越えたつながりを象徴している。その後、この組紐は瀧のブレスレットとなって、三年後の瀧が三葉と入れ替わるトリガーとなる。

二度目の出会いは、二人の入れ替わりが停止したあとに訪れる。停止したのは、二〇一三年一〇月四日に糸守町に彗星の破片が落ちて三葉を含む多くの住民が亡くなったためである。瀧の方も、入れ替わりに三年の時間差があることに気付いておらず、過去の彗星落下は記憶の彼方にあった。三葉のことが気になる瀧は、入れ替わり時の記憶をたよりに飛驒へ向かう。ここで地域の人と出会うなかで、先日まで入れ替わっていた三葉が三年前の彗星落下で亡くなっていたことを知る。愕然としつつも諦められない瀧は、薄れつつある記憶をたどって、宮水神社のご神体がある場所（過去の彗星落下でできたクレータの中心）へ向かう。そこは、かつて三葉と入れ替わった瀧が、三葉の家族とともに口かみ酒（三葉が宮水神社の儀式で口にくんで作ったお酒で「三葉の半分」と説明される）を奉納した場

所であつた。ご神体内にある酒は、三年後も苔むしたままで置かれ、瀧はこの酒を飲むことで三葉との「むすび」を取り戻し、彗星が落下する日の朝に三葉と入れ替わることができた。

ここからは三葉の姿になった瀧が彗星落下の前に、糸守町の人々を避難させるべく、友人たちと奮闘する様子が描かれる。しかし、彼らだけでは限界があり、糸守町長の三葉の父に住民避難を直談判に行く。しかし、まったく取り合われないうばかりか、父親に三葉本人でないことを見破られてしまう。失意のなかで町役場を去る三葉（瀧）は、未来のご神体近くで瀧（三葉）が目覚めたことを感じ取って会いに行く。瀧と三葉は同じご神体近くのクレーターの縁にたどり着くが、三年の時間差があつて互いのかすかな声が耳底に響くだけである。しかし、時刻が黄昏時（かたわれ時）にさしかかったとき、入れ替わりが解けて二人は対面できた。黄昏時は、映画では「誰そ彼と我をな問ひそ九月の露に濡れつつ君待つ我そ」（万葉集）の歌とともに「逢魔が時」と説明される。瀧は三葉に彗星落下が迫っていることを伝え、目覚めても互いの名前を忘れないようにと瀧が三葉の手のひらにマジックで書き込んだ。今度は三葉が瀧の手に名前を書こうとしたときに黄昏時は終わり、瀧だけが二〇一六年に残された。

しかも、出会いの代償として、瀧は三葉の名を思い出せなくなってしまう。

二〇一三年にひとり残された三葉は、彗星落下から町を守るため、友人たちと避難計画を実行に移すがうまくはいかず、その最中に瀧の名も思い出せなくなる。住民避難を成功させる最後の手段として、再び父親のもとに向かうが、途中の坂で躓き、気持ちも途切れそうになる。しかし、手のひらに彼の名があつたことを思いだして見たら、そこには「すきだ」という文字が書かれてあつた。この言葉に勇気づけられた三葉は、今度は本人として父親の説得に成功し、それが奇跡的に町の人々を救うことにつながるのである。

さて、以上のあらすじをまとめてみて、私はこの映画は歴史研究とも関わるのではないかと思っている。歴史研究はまず過去をフラットに受け入れることから始めなければならないが、かりに大震災のような多くの犠牲者を出した過去ならばどうだろうか。研究者の前に一人の人間であるとすれば、このような過去がもし何らかの方法であらかじめ避けられたならばと考えてしまう。大震災にかぎらず、悲しい出来事は誰にでも訪れるが、それでも残された人間は生きていかなければならない。受け入れたくない過去を、どのように歴史として描くのか、そしてただ描くだけでいいの

かという問いを、この映画は歴史を学ぶ者に突きつけている。

この映画で、三葉はカラストロフを回避する使命を背負っているが、瀧の役割はなんだろうか。私の勝手な解釈では、彼は歴史を遡りながら大切な人を救う役目を背負っている。瀧は三葉と入れ替わることで、三年前の過去を別の人物として生きている。三葉がしばらくの田舎のしがらみを打破していくさまは、歴史物語の主人公を演じているかのようである。けれども、三葉の姿をした瀧は、彗星の落下から三葉やその友人らを救おうとして父親を説得しようとするが、できなかった。瀧はいくら三葉と入れ替わったところで、本来に重要な歴史を書き換えることはできないのである。父親説得に失敗した瀧が、「三葉なら説得できたのか」と自問し、自分と入れ替わっている三葉に直接会いに行くことは重要である。

歴史家はさまざまな文献などを通して、過去の人物、社会を把握しようとする。それは究極的にいえば、対象と入れ替わるがごとく、過去の時代とそこに生きる人々を描くことである。しかし、そうしたところで、彼らにとっての本当の救いを用意できるわけではない現実を思い知らされる。では、歴史家はただ感情を押し殺して、過去を描くだけでいいのだろうか。この問

いに答えることは容易ではないが、ひとつ言えるのは、どこまでも過去を過去として丁寧に把握することにとめながら、過去の人々にとっての救済をもたらすことができるのはその時代の人でしかないことを自覚しておくこと、そしてこの二重の謙虚さのうえに、それでもなんらかの思いを現在の地点から届けようとするのが大事ではなからうか。瀧と三葉が時間を越えて出会えた黄昏時は、現実の歴史家には到来しない。しかし、もしそうした時間がわずかでも訪れたならば、彼らの手のひらに書き込む言葉と想いを、歴史の研究に従事するものとして心の中で準備しておきたいものである。

李公麟「五馬図」との出会い

古松 崇志

この正月明けに、東京国立博物館で特別展「顔真卿 王羲之を超えた名筆」を參觀した。顔真卿の作品を中核に中国書法史を通覧する内容で、数多くの優品が

そろい、見応えあるものだった。とりわけ、台湾の故宮博物院に所蔵される顔真卿の真筆「祭姪文稿」の出陳が話題となった。台北でも減多に展示されないこの作品を見るためか、中国からの観覧客が大挙押し寄せていたのが印象的だった。しかしながら、わたしの一番の目当ては別にあつた。「五馬図」という絵画である。

「五馬図」は、十一世紀後半、北宋の李公麟が皇帝に貢納された五頭の馬を描いた絵画である。後世に大きな影響を及ぼし、中国絵画史上の最高傑作のひとつに挙げられてきた。歴代王朝でも珍重され、清代には北京紫禁城の宮中の書画コレクションに加えられた。それが清朝滅亡後の一九二〇年代に日本に持ち出され、日本の収蔵家の所蔵に帰したあと、戦後はずっと行方不明となった幻の名品であつた。戦災で焼失したという噂もあつたが、最近になって個人の収蔵家より東京国立博物館へ寄贈され、顔真卿の書を崇拝した黄庭堅の題記と跋が附されていることにかこつけて、今回の顔真卿展で一般にお目見えすることになった。日本にもたらされた一九二八年に、一度だけ東京で公開展示されたそうだから、今回の出陳はじつに九十年ぶりということになる。

歴史学を学び、中国と北方遊牧民とのかかわりにつ

いて少し調べている関係で、もともと馬にかかわる文物には関心があつたので、堂々たる名馬を克明に描いた宋代名画の歴史的な再出現に際会できたことに興奮した。博物館で実見すると、人馬の精緻な描写と立体的な表現に感嘆した。これまでコロタイプ白黒写真でしか見られなかったもので、部分ごとに精密に色を塗り分けていることにも驚いた。そして、ひたすら絵の素晴らしさに引き込まれた。

この絵は、じつは宋代史にかかわる歴史史料としても面白い。黄庭堅の手になるとされる題記から、描かれた馬の来歴が分かるからである。ただし、絵画と題記ともに、北宋時代に描かれ書かれたものがすべてそのまま残っているわけではなく、後世の改変を受けた部分があるという留保がつく。しかし、当時の文献史料と照合すれば、題記の内容の信憑性そのものを疑う必要はない。

題記はそれぞれの馬の後ろ（左側）に書かれる。一頭目が「右一匹元祐元年十二月十六日左驥驥院收于闔國進到鳳頭驄八歳五尺四寸」、二頭目が「右一匹元祐元年四月初三日左驥驥院收董攢進到錦膊驄八歳四尺六寸」、三頭目が「右一匹元祐二年十二月廿三日於左天駟監揀中秦馬好頭赤九歳四尺六寸」とあり、四頭目はやや形式を異にし、「元祐三年閏月十九日温溪心進照

夜白」とある。つとに知られているように、五頭目だけは李公麟の絵ではなく、後補されたものである。題記を欠くが、元代に絵を目撃した周密によれば、もとの絵には「元祐三年正月上元□□□進滿川花」（『雲煙過眼録』卷上）とあり、照夜白より前の四頭目として描かれていたようだ。

これらの題記によつて、五頭の馬が、北宋の元祐元（三年（一〇八六））に左驥驥院・左天驕監など都開封の厩舎に収められた御馬（皇帝専用馬）だったと想定できる。最初の鳳頭驄（驄は芦毛馬の意）は于闐国、二頭目の錦膊驄は董氈、四頭目の照夜白は温溪心がそれぞれ宋朝皇帝（時の皇帝は哲宗）へ貢納した名馬である。

于闐国はタリム盆地南側のオアシス国家コータン国を指すが、十一世紀初頭に仏教国が減ぼされ、西方のトルコ系ムスリム王朝のカラハン朝の支配下に入った。十一世紀後半には、宋朝へ毎年のように朝貢使節（実態は商人）を派遣し、西アジア産の乳香を中心に大量の香薬をもたらし朝貢貿易をおこなった。香薬と並び盛んに貢納したのが馬であったが、それは普通の馬とは異なる大型馬だったことが文献史料より知られる。体高五尺四寸（一六〇センチ強）の鳳頭驄も、宋朝における上等の戦馬が四尺七寸と定められていたのと比

較しても、かなりの大型馬であることが分かる。コータン自体が馬の産地だが、大型の汗血馬で知られる中央アジアのフェルガナ産の名馬などが、さらに西方より運ばれてきた可能性がある。なお、五頭目の満川花については、「花馬」（斑模様馬）がコータンの名産だったことから、周密が記録した題記の欠損部を「于闐国」と推測する中国の研究者の説がある。これが正しいければ、五馬図のうちの二頭がコータンの貢納馬だということになる。

つぎに、董氈は青唐（現在の青海省西寧）を中心とするチベット王朝を立てた唃廝囉の子でその後を継いだ君主で、温溪心はその有力部族首領の一人である。青唐のチベット王朝は、十一世紀に黄河上流部の青海（アムド）に興り、オルドスから河西回廊へ版図を広げたタングトの西夏と中原の宋朝（北宋）という大勢力に挟まれながら、おおむねは宋朝と友好関係を結び交易の利益を得て繁栄した。青海はユーラシア東部で屈指の馬の産地で、宋への主な輸出品は馬であった。前近代において機動力に最も富んだ乗り物だった馬は、とくに軍事的な用途で重要だった。中国北辺の馬の産地を契丹や西夏に押さえられてしまっていた宋朝では、自前で良質の馬の生産ができないばかりか、禁輸品の馬を輸入することもままならなかった。そこで、馬の

調達先として目をつけたのが青唐一帯であった。十一世紀の後半には、四川の茶の専売収益でもって青唐の馬を買い付ける制度を整備し、毎年一万五千頭から二万頭の馬を調達することに成功した。三頭目の好頭赤は「秦馬」すなわち秦州（現在の甘肅省天水市）の馬を選抜したもののだが、秦州は青唐とのあいだの茶馬貿易の最大の窓口で、青唐の商人から宋朝政府が馬を買い付け、そのうちのすぐれたものを開封の厩舎にもたらしたということになる。もちろん、買い付けばかりでなく、朝貢品として名馬が献じられることもあり、董氈や温溪心が進めた錦膊驄や照夜白がまさしくそれに当たる。

なお、「五馬図」のコータン馬も青唐を経由してもたらされた。当時河西回廊は宋朝に敵対的な西夏が掌握していたため、祁連山脈南側の青海ルートが中央アジアと中原を結ぶ主要な交易路となっており、青唐はまさにその重要拠点だった。青唐にはコータン商人の居留地がつくられていて、コータンと青唐のあいだに密接なつながりがあったことも知られている。

このように、「五馬図」は、宋朝における青唐産および青唐経由でもたらされる馬の重要性を示すヴィジュアルな史料であり、そこからは、背景にある十一世紀後半のユーラシア東方の国際情勢を読み取ることも

できるのである。

※本稿作成中に、新刊の板倉聖哲編『李公麟五馬図』（羽鳥書店、二〇一九年三月）を入手した。「五馬図」そのものを原寸大の美麗な写真で紹介するほか、編者の板倉氏の研究論文が掲載され、中国絵画史上におけるこの絵の位置づけと重要性が明らかにされている。この作品の魅力を余すことなく伝える素晴らしい画冊で、ぜひ手に取って見ていただきたいと思う。

図面の作法

向井 佑介

発掘した遺物を考古学者が観察し、図面を描く——日本ではめずらしくない光景である。日本の考古学者は、とかく図面にこだわる。石器の実測図には石材を打ち割って加工した手順が反映されているのがふつうだし、土器の実測図にも成形・調整の過程で生じた各種の痕跡が記入され、器形・技法・装飾などの特徴を

的確に表現するためのさまざまなルールがある。

「図面はきれいでなければならぬ」と主張する人がいる一方で、「下手でも正確でなければならぬ」という人がいて、学生を戸惑わせることも多い。しかし、研究者ごとに図面へのこだわりが異なるとしても、彼らがイメージする理想の図面に大差はない。考古学の図面とは、遺物の観察所見を記録し、表現し、共有するための手段であり、それには一定の共通した規則が必要だと考えられてきたからである。

とはいえ、国や地域によって言語や習俗が異なるように、学問の伝統や環境が異なれば、図面も異なる。日本の実測図では向かって右側に断面図を配置するのに対し、ヨーロッパなどの国々に断面図を左側に配置するところが多いことは、よく知られている。日本から海を隔てた中国でも、実測図の断面は向かって左側に配するのが通例である。

異なるのは図面の配置だけではない。中国考古学の世界において、中国人の考古学者が自ら遺物を実測し、図面を作成することは、ほとんどない。中国では、発掘された遺物の図面を作成するのは技工と呼ばれる専門の職人であり、研究者自身は実測の方法を知っている。その技術を披露する機会はない。一方、私を含めて中国考古学を専門とする日本人研究者は、現地の

博物館や研究所で考古遺物の実測をすることが多い。しかし、中国人研究者にはそうした習慣がないから、現地スタッフの好奇の目にさらされるのが常である。

むかし京都大学名誉教授の小林行雄が土器などの器形を写しとるために発明したといわれる真弧（マコ）をはじめとして、日本考古学の実測用具には独自の発達をとげたものが少なくない。限られた資料調査の間を有効に活用するため、私たちはさまざまな道具を携えて調査に出るのだが、それらの道具が現地のスタッフにとっては目新しく、図面を描いている横から、「これは何という道具か」「どうやって使うのか」と口々にたずねられて、なかなか仕事がかどらない。現地の研究者に頼まれて、日本の実測用具を置いて帰ったことも、一度や二度ではない。

ただ、結局のところ、中国人の研究者たちは、自分自身で図面を描くわけではないから、最後まで熱心に私たちの作業を見学しているのは、図面を描く専門職の技工だったりもする。見られているプレッシャーがあるので、あまりいい加減な仕事はできない。かといって、あまり丁寧に計測していたのでは、時間がかかりすぎて、見ているほうも退屈してしまう。見物人の心のうちまで私たちが気にする義理はないとはいえ、やはり視線が気になる。おかげで適度に丁寧で正確な

図面を、すみやかに作成する技術が身についた。

現在の私たちでさえこうであるから、戦前に大陸の各地を調査した先学たちに、現地の人びとが奇異の目を向けたであろうことは、想像に難くない。人文研の前身である東方文化研究所の水野清一らがこなった雲岡石窟の調査（一九三八～四四年）では、大同市内の理髪店から大きな鏡を調達してきて写真撮影の照明に利用し、錘球をぶら下げた長い釣り竿状の道具で石窟内部を測量したというから、いかにも奇妙な光景であったことは間違いない。もつとも、その作業には、現地の人びとも日雇いで駆り出されていたから、すぐに見慣れた光景になっていたのかもしれないが。

さて、今年の二月一三日から四月一四日にかけて、京都大学総合博物館で「カメラが写した八〇年前の中国―京都大学人文科学研究所蔵 華北交通写真―」という特別展が開催され、私も実行委員のひとりとして、雲岡石窟の展示部分を担当することになった。展示の目玉は華北交通会社が広報用にストックしていた写真群で、交通・資源・産業などに関係する写真のほか、現在すでに見ることのできない華北の景観や風俗の写真を豊富に含んだ貴重な学術資料である。

その展示室の一角に置かれたガラスケースのなかに、ちやうど雲岡調査の時期に水野清一が記録した野帳が

陳列されている。特別展の実行委員の菊地曉さんが、関係者から預かったものである。その野帳には、調査の行程はもちろん、各地の遺跡や遺物、民俗資料などについて見聞した内容が、びっしりと記録されている。どうやら現地見学时に鉛筆で走り書きしたものを、あとから宿舎などでペンを用いて清書したものらしい。的確なスケッチや略測図をまじえたそれらの記録が、のちに水野が発表した数々の報告や論文を生む原点になったと考えると感慨深い。

近年、パソコンやスマートフォンの発達によって、ふだんの生活のなかで私たちが手書きで記録をとる機会は少なくなってきた。自身がフィールドに出るときのことを考えても、デジタルカメラなどで手軽に情報や行程の記録ができるようになったぶん、手書きの調査記録がおろそかになってきたように感じる。実測図は他人に見られても恥ずかしくないものを描いてきたつもりだが、一方の野帳は自信をもって他人に見せられるようなものではなく、ましてや水野の野帳のように展示ケースに入れられるようなものではありえない。展示できるようなものでなくとも、せめて他人に見られて恥ずかしくない野帳にしたいものである――大先輩の野帳を前に、思いを新たにした。

浅原 達郎

もうひとつの斉長城 日古 三〇号 十月

終古—中国古代の基礎史料の十五年— 日古 三一号 二月

池田 さなえ

討論 二〇一七年十一月例会「大衆消費と天皇・皇室—大正・昭和戦前期を事例として—」

日本史研究 六六八号 四月

固焼煎餅ヲ柔ラカク咀嚼スルノ論 人文 六五号 六月

戦前の皇室財産 森暢平、河西秀哉編著『皇后四代の歴史—昭憲皇太后から美智子皇后まで』 吉川弘文館 六月

明治中期の皇室と社会—長野県横川山御料林における天皇・皇室の「不在」 高木博志編著『近代天皇制と社会』 思文閣出版 十月

「皇室財産設定論」再考 ヒストリア 二七一号 十二月

●皇室財産の政治史—明治二〇年代の御料地「処分」と宮中・府中 人文書院 三月

日本史研究会近現代史部会大会共同研究報告 「歴史」を語る—「記憶論」への挑戦と人文学への応答」趣旨（共同執筆・第一著者兼責任者） 日本史研究 六七九号 三月

池田 巧

方言研究から見た現代中国② 現代中国語を創った若き天才 東亜 六一二号 六月

方言研究から見た現代中国③ 方言訛りの普通話 東亜 六一五号 九月

方言研究から見た現代中国④ 広東語のカタカナ表記を考える 東亜 六一八号 十二月

方言研究から見た現代中国⑤ 現代中国語音のカタカナ表記を考える 東亜 六二一号 三月

ムニャ語の自他動詞と使役構文 池田巧編『シナチベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』 京都大学人文科学研究所 三月

Section I Album: Sven Hedin's Original Drawings, Reproductions Discovered in the Department of Geography, and Images of Tibet a Century Thereafter. TANAKA Kazuko (ed.) *The Explorer Sven Hedin and Kyoto University*. Trans Pacific Press. 三月

石井 美保

'Anthropologies of Science and Technologies in Japan' Yoko Taguchi, Miki Namba, Grant Jun Otsuki, Gergely

Mohaei, Shubei Kimura, and Miho Ishii. STS Across Borders Digital Exhibit, curated by Aalok Khandekar and Kim Fortun. *Society for Social Studies of Science*.

八月
喪われた声を聴きなおよす―追悼―記念の限界と死者との共在
田中雅一・松嶋健編『トラウマを生きる』 京都大学学術
出版会 十一月

複眼時評 隅つこの力 京都大学新聞 二六一五号 十二月
科学の詩学にむけて 山室信一編『人文学宣言』 ナカニシ
ヤ出版 三月

生き物としての実験室と有機的な網目 山室信一・岡田暁
生・小関隆・藤原辰史編『われわれはどんな「世界」を生
きているのか―来るべき人文学のために』 ナカニシヤ出
版 三月

石川 禎 浩

書評 笹川裕史編『戦時秩序に巣喰う「声」』

ある拓本をめぐる奇縁 東方 四四六号 四月
図書 八三二号 五月

武上真理子さんの思い出 孫文研究 六二二号 六月

中共一大研究回顧録 中共創建史研究 三輯 上海人民出
版社 十一月

●中国近代の巨人とその著作―曾國藩、蔣介石、毛沢東（共
著） 研文出版 一月

中国近現代における文明史観の受容と展開―兼ねて「四大文

明」説の由来を論ず

史林 一〇二卷一号 一月

稲葉 穰

オアシス都市の発展―西トルキスタン 小松久男他編『中央
ユーラシア史研究入門』 山川出版社 四月

稲本 泰生

中国の仏伝美術と釈迦信仰―北朝石窟の事例を中心に 特別
展図録『お釈迦さんワールド―ブッダになったひと』 龍
谷ミュージアム 四月

東アジアにおける本生図像の来源と継承をめぐる―阿育王
塔及び施身聞偈・七日翹足讚仏（弗沙仏授記）の図像を例
に」 科研費成果報告書『中央アジア仏教美術の研究―釈
迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に』 四月

龍門研究の継承・更新・発信 人文 六五号 六月

唐代における高僧像の制作と鑑真和上像前史―八世紀初頭の
状況を中心に 肥田路美編『アジア仏教美術論集 東アジ
アⅡ 隋唐』 中央公論美術出版 三月

岩城 卓二

●本興寺文書 五卷 清文堂出版 二月
下級武士の身分上昇 大塩研究 八〇号 二月

●科研費成果報告書『幕末期における大坂・大坂城の軍事的役
割と畿内・近国藩』 三月

人文考 朝日新聞（夕刊） 三月二八日

王 寺 賢 太

戦後民主主義の「革命的な」批判のために 桂秀実『革命的な、あまりに革命的な』ちくま学芸文庫増補版解説 筑摩書房 五月

脱成長主義 佐伯啓思さんが王寺賢太さんと語る

京都新聞 五月三〇日・三一日

- Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, t. 2, édition critique dirigée par A. Strugnell, Gianluigi Goggi et Kenta Ohji, Fernay-Voltaire, Centre international d'étude du 18e siècle. 九月
- 〈68年5月〉と私たち―「現代思想と政治」の系譜学（共編） 京都大学人文科学研究所 三月

京大人文研のアルチュセール―〈68年前後〉 王寺・立木編『〈68年5月〉と私たち』京都大学人文科学研究所 三月

抹消符号を付されたユートピア―アイエズス会パラグアイ布教区の廃墟から啓蒙の未来へ 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『われわれはどんな「世界」を生きているのか』京都大学人文科学研究所・ナカニシヤ出版 三月

岡 田 暁 生

翻訳 アドルノ『幻想曲風に』（藤井俊之と共訳） 法政大学出版局 十二月

- われわれはどんな「世界」を生きているのか（共編） 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編 ナカニシヤ出版

ストーリーの新しい「形式」を芸術に学ぶ 山室信一（編）『人文宣言』ナカニシヤ出版 三月

岡 村 秀 典

東漢鏡名工傳―藝術家的出現 陳珏主編『心與物融―饒宗頤先生百歲華誕「漢學與物質文化」國際研討會論文集』聯經出版事業股份有限公司 一月

浙江嵊州漢晉文物調查報告 史林 一〇一卷五号 九月

●中国古代車馬研究（編著、林巳奈夫著） 臨川書店 十月

中国の海の祭祀 春成秀爾編『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学別冊二七 雄山閣 十一月

The Investigation and Study of the Yun-kang Grottoes, TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES 63, The Tôhō Gakkai 十一月

雲岡石窟の初期造像―曇曜五窟の仏龕を中心として 東方学報 九三冊 十二月

小 川 佐和子

書評 フィオードロワ・アナスタシア著『リアリズムの幻想―日ソ映画交流史 一九二五―一五五』 ロシア語ロシア文学研究 五〇号 十月

失われた祖国、彷徨う自己―一九二〇年代のフランスにおける亡命ロシア人映画 科研費成果報告書 諫早勇一編『ル

ースキイ・ミール―文化共生のダイナミクス」 二月

『マリアの首』随想 山室信一編『人文学宣言』ナカニシヤ出版 三月

古 勝 隆 一

隋代儒教的地域性―以「山東儒者」為中心 『林慶彰教授七秩華誕壽慶論文集』萬卷樓 九月

翻訳『文史通義』内篇二譯注(二二)(共訳)

●目録学の誕生―劉向が生んだ書物文化 臨川書店 十二月
翻訳 井筒俊彦『東洋哲学の構造―エラノス会議講演集』(共訳) 慶應義塾大学出版会 三月

小 関 隆

●アイルランド革命…第一次世界大戦と二つの国家の誕生 岩波書店 四月

●われわれはどんな「世界」を生きているのか(共編) 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編 ナカニシヤ出版 三月

作品としての人文学 山室信一(編)『人文学宣言』ナカニシヤ出版 三月

プログラム・ノート 腫れものとしての第一次世界大戦、そしてハリー 世田谷パブリック・シアター『銀杯』 十一月

佐 藤 淳 二

私たちはどう生き(残)るか? 転形期と人文学 人文 六五号 六月

六八年から人間の終わりを考える 週刊読書人 六月一日
書評 二〇一八年の収獲アンケート

〈冷戦2.0〉と人文学の使命 山室信一編『人文学宣言』三月
週刊読書人 十二月一四日

白 須 裕 之

漢字構造の代数的記述についての予備的考察 第30回東洋学へのコンピュータ利用 三月

瀬戸口 明 久

シンポジウム…生命科学とビッグデータ はじめに 生物学史研究 九七号 八月

自然の世界と人間の世界 山室信一編『人文学宣言』ナカニシヤ出版 三月

書評 The Ironic Path of Yoichiro Murakami's History of Science, East Asian Science, Technology and Society: An International Journal, 13. 三月

高 木 博 志

江戸から明治へ京都御所と御苑の歴史を綴る(後編) 京都御苑ニュース 一三八号 六月一日

明治維新五〇年、六〇年の記憶と顕彰―近代の主役は普通の

市民（明治一五〇年を見つめ直す）

新聞研究 八〇三号 六月

古都奈良・京都の発見―岡倉天心「日本美術史」を読む

人文 六五号 六月

●京都―流動的歴史（共著、謝躍訳） 社会科学文献出版社

七月

金光教と遊廓・花街―都市布教と民衆

金光教教学研究所紀要 金光教学 五八号 九月

●『近代天皇制と社会』（編著） 思文閣出版

明治維新五〇年、六〇年の記憶と顕彰―一九一七年、一九二

八年の政治文化 ダニエル・V・ボツマン他編『明治一

五〇年』で考える…近代移行期の社会と空間』 山川出版

社 十一月

天皇制の聖地の形成 都市史学会編『日本都市史・建築史事

典』 丸善出版 十一月

The 50th and 60th Anniversaries of the Meiji Restora-

tion: Memory, Commemoration and Political Culture in

the Pre-War Period, *Japanese Studies* (Taylor&Francis

Online), Volume38 十二月

小波魚青「戊辰之役之図」と明治維新観 並木誠士編『近代

京都の美術工芸―制作・流通・観賞』 思文閣出版 三月

高階 絵里加

画家たちの西洋体験―聖徳記念絵画館の壁画をめぐる―

神園一九号 五月

手仕事と現代性―一九三七年パリ万国博覧会における日本の

展示をめぐる 日仏美術学会会報 三七号 五月

日本館の展示について J.SAKAKURA ARCHITECTE

PARIS-TOKYO 実行委員会編『Junzo Sakakura Pavilion

du Japon de l'Exposition internationale de Paris de

1937 坂倉準三（パリ万国博覧会日本館）』 建築資料研究社

展覧会 日本経済新聞（夕刊） 二月

四月一三日、五月二二日、六月一日、七月二七日、十月一

七日、十一月二〇日、十二月一日、一月二九日、二月八日

田中雅一

田中雅一

Nature and the Body in Male Sex Stimulants. Ikuya To-

koro and Kaori Kawai (eds.) *Anthropology of Things*,

Kyoto University Press, Trans Pacific Press 二月

《第12回日本文化人類学会賞受賞記念論文》《格子》と《波》

とナシヨナリズム―巨大な遺体安置所で Love Trip を聴

きながら考えたこと 文化人類学 八二巻四号 三月

●誘惑する文化人類学 世界思想社 六月

●Contact Zone（コンタクト・ゾーン）（編集） 一〇号 人

間・環境学研究科 六月

特集・医療人類学にとってナラティブとは何か？―はじめに

Contact Zone（コンタクト・ゾーン） 一〇号 六月

アジア・太平洋地域を中心とする軍事環境問題の比較研究②

第四七回二〇一七三菱財団研究・事業報告書 公益財団法人

人三菱財団

七月

アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に出会うということ
日本オーラル・ヒストリー研究 一四号 九月

セクシュアリティの文化人類学が面白いわけ
トイ人 学問する人のポータルサイト 十一月

Morality and Instrumentality: A Practical Approach to Theorizing the Other. Kaori Kawai (ed.) *Others: The Evolution of Human Society*, Kyoto University Press

●トラウマ研究2 ト라우マを共有する(共編著) 京都大学

序章—トラウマを共有する 田中雅一・松嶋健共編『トラウマ研究2 ト라우マを共有する』 京都大学学術出版会 三月

二次トラウマと感情労働—アウシュヴィッツのガイドたちの語りをめぐって 田中雅一・松嶋健共編『トラウマ研究2 ト라우マを共有する』 京都大学学術出版会 三月

Grids, Waves and Nationalism: Some Thoughts from Listening to "Good Vibrations" in a Big Morque.
Japanese Review of Cultural Anthropology 19(1) 三月

立木 康 介

ラカンと女たち 第八回 マリー・ボナパルト(後)—盗まれ……買戻された手紙たち 三田文学 一三三号 五月
書評 久保田泰考著『ニューロ ラカン—脳とフロイト的無意識のリアル』 精神分析研究 六二巻三号 七月

意欲のリアル

ラカンと女たち 第九回 肉屋の美人細君—ヒステリーの「満たされぬ欲望をもつ欲望」 三田文学 一三四号 八月

ワークシヨップ「エディプスと女性的なるもの」(特集序文)
ジャック・ラカン研究 十七号 九月

トラウマと精神分析—フロイトにみる「外傷」概念の分裂
田中雅一・松嶋健編『トラウマを生きる』 京都大学学術出版会 十一月

ラカンと女たち 第十回 マルグリット・デュラス—ラカンの教えを、ラカン抜きに……

ラカンと女たち 第十一回 アビラのテレサ—女の享楽とはなにか? 三田文学 一三六号 二月

●(68年5月)と私たち—「現代思想と政治」の系譜学(共編)
京都大学人文科学研究所

〈68年5月〉にラカンはなにを見たか 王寺賢太・立木康介編『68年5月と私たち—「現代思想と政治」の系譜学』 京都大学人文科学研究所 三月

●京(みやこ)にフランスあり—アンステイチュ・フランセ関西の草創期(共著) 京都大学人文科学研究所/アンステイチュ・フランセ関西

翻訳 ミッシェル・ワッセルマン「九条山から吉田へ—関西日仏学館「新館」八〇周年を記念して」 ミッシェル・ワッセルマン/立木康介『京にフランスあり—アンステイチュ・フランセ関西の草創期』 三月

翻訳 ミッシェル・ワッセルマン「動乱の時代の関西日仏学館（一九四〇～一九四五）」 ミッシェル・ワッセルマン／立木康介『京にフランスあり―アンステイチュ・フランセ関西の草創期』 三月

徳 永 悠

排日移民法と在メキシコ日本人―米墨国境地域における日本人移民社会圏の発展― 移民研究年報 二四号 六月
書評 廣部泉『人種戦争という寓話―黄禍論とアジア主義』 アメリカ史評論 三六号 一月

Japanese Internment as an Agricultural Labor Crisis: Wartime Debates over Food Security versus Military Necessity, *Southern California Quarterly* 101 (1), University of California Press. 二月

永 田 知 之

歌舞伎役者一代記―初世中村仲蔵『月雪花寝物語』を読む 人文 六五号 六月

学界展望・文学・三、隋・唐・五代／八、書誌学

日本中国学会報 七〇集 十月
中国古典文学の「思想」と「批評」―20世紀前半に編まれた通史をめぐって 久保昭博・河田学・岩松正洋編『虚実のあわいに Le Fictif, ou le réel』大浦康介退職記念論文集 大浦康介退職記念論文編集委員会 三月

中 西 竜 也

中国ムスリムからの眺望

ミネルヴァ通信「究」 通巻八七号 六月

中国ムスリムからの眺望（二）

ミネルヴァ通信「究」 通巻八八号 七月

中国ムスリムからの眺望（三）

ミネルヴァ通信「究」 通巻八九号 八月

Variations of Islamic Military Cosmopolitanism: The Survival Strategies of Hui Muslims during the Modern Period. R. Michael Feener and Joshua Gedacht (eds.) *Challenging Cosmopolitanism: Coercion, Mobility and Displacement in Islamic Asia*. Edinburgh University Press. 九月

異文化間の対話と共生を考える―中国ムスリム研究の近年の動向 思想 一一三四号 九月

Ma Dexin and Ibn 'Arabi's Prospects Regarding the Afterlife: A Chinese Expression of Sufism during the 19th Century. Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii (eds.) *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies, Kenan Ryfi Center for Sufi Studies*, Kyoto University. 十二月

明末清初の激動と中国ムスリム 歴史評論 八二六号 二月

福 谷 彬

朱子語類訳注巻十六（上）大学三（上）（共著） 汲古書院

二〇一七年日本学界朱子学研究総述 四月
朱子学年鑑二〇一八(商務印書館) 六号 九月

●南宋道学の展開 京都大学学術出版会 三月

福家 崇洋

書評 川村邦光著『出口なお・王仁三郎 世界を水晶の世に致すぞよ』 日本思想史学 五〇号 九月

『国体明徴』と宗教運動 高木博志編『近代天皇制と社会』 思文閣出版 十月

座談会 社会からみえる天皇制 天皇制からみえる現代 鴨東通信 一〇七号 十月

宮崎滔天と北一輝(上) ことたま 八七卷一一号 十月

宮崎滔天と北一輝(下) ことたま 八八卷二号 一月

国史顕彰と国家改造—平泉澄に焦点をあつて 2018 NARA-EURASIA Institute's Report 三月

藤井 俊之

虚構原則への誘い—寺山修司『あ、荒野』を読む— 人文學報 一一二号 六月

名前、この名付けえぬもの—ベンヤミンの初期言語論— 思想 一一三一 七月

翻訳 テオドル・W・アドルノ『アドルノ音楽論集 幻想曲風に』(共訳) 法政大学出版局 十二月

モデルネ 新しいものの思考法 山室信一、岡田暁生、小関

隆、藤原辰史編『われわれはどんな「世界」を生きているのか 来るべき人文学のために』 ナカニシヤ出版 三月

藤井 律之

江南開発と南朝中心の世界秩序の構築 南川高志編『三七八年 失われた古代帝国の秩序(歴史の転換期 第二卷)』 山川出版社 六月

土断—難民の定住容認とその裏側 南川高志編『三七八年 失われた古代帝国の秩序(歴史の転換期 第二卷)』 山川出版社 六月

書評 堀内淳一著『北朝社会における南朝文化の受容—外交使節と亡命者の影響』 史学雑誌 一二八編一号 一月

書評 今井宏昌『暴力の経験史—第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験一九一八—一九二三』 ゲシヒテ 一一号 四月

藤原 辰史

この世界の土台を捉える(特集 現代思想の三一六冊 農業) 現代思想 四六卷六号 四月

生態学の「分解者」概念について(3) 現代思想 四六卷八号 五月

書評 カロリン・エムケ『憎しみに抗って』(浅井晶子訳、みずす書房) 読売新聞 五月六日

書評 佐藤泉『1950年代、批評の政治学』(中公叢書) 読売新聞 五月一三日

書評 リン・H・ニコラウス『ナチズムに囚われた子どもたち 上下』(若林美佐知識、白水社)

読売新聞 五月二七日

対談 栗原彬×藤原辰史 化生の音を聴く

現代思想(総特集 石牟礼道子) 四六巻七号 五月

生産者の「分解者」概念について(4)

現代思想 四六巻一〇号 六月

書評 ピーター・チャップマン『バナナのグローバル・ヒストリー』(小澤卓也、立川ジェームズ訳、ミネルヴァ書房)

東京新聞 六月三日

書評 川満彰『陸軍中野学校と沖縄戦』(吉川弘文館)

読売新聞 六月二四日

Colonial Seeds, Imperialist Genes: Horai Rice and Agricultural Development. H. Mizuno/ A. Moore / J. DiMoia, *Engineering Asia: Technology, Colonial Development and the Cold War Order*. Bloomsbury.

七月

●트랙터의 세계사: 인류의 역사를 바꾼 철마들 (『トラクターの世界史』韓国語版) 판키뮤니케이션

七月

書評 津村記久子『デイス・イズ・ザ・デイ』(朝日新聞出版)

七月二二日

書評 バラク・クシュナー『ラーメンの歴史学—ホットな国民食からクールな世界食へ』(幾島幸子訳、明石書店)

週刊現代 七月

子どもの安全こそ優先

北海道新聞 七月一四日

「たてもの」と「たべもの」—根から考える

建築雑誌(日本建築学会) 一三三巻一七一三号 七月

『原発事故と「食」刊行記念対談 放射能汚染から考える成熟社会への課題

POSSIE 三九号 七月

書評 山川徹『カルピスをつくった男 三島海雲』(小学館)

読売新聞 八月二二日

書評 井上ひさし『ボローニャ紀行』文春文庫

読売新聞 八月二二日

未完の学校給食

Vesta 一一号 八月

トラクター・ルイセンコ・イタイイタイ病—吉岡金市による諸科学の統一 坂野徹・塚原東吾編『帝国日本の科学思想史』勁草書房

九月

書評 藤井誠一郎『ゴミ収集という仕事』(コモンズ)

読売新聞 九月二日

ぼくたちの子育て時評

クエーン 五五号 九月

ぼく、ぼぐす、つくろう(1)

現代思想 四六巻一三号 九月

ぼく、ぼぐす、つくろう(2)

現代思想 四六巻一五号 十月

「登呂で、わたしは考えた。」アフタートーク(藤原辰史×本原令子) 本原令子『登呂で、わたしは考えた』静岡新聞

社 十月

「登呂で、オレらは考えた。」展公開トーク『登呂キッチン』

鼎談収録(藤原辰史、長坂潔暁、本原令子) 本原令子

『登呂で、わたしは考えた』静岡新聞社 十月

書評 NHKスペシャル取材班『戦慄の記録インパール』

(岩波書店)

読売新聞 十月二八日

書評 在日コリアンが大阪弁で語る濃密な歴史曼荼羅(朴沙

羅『家の歴史を書く』筑摩書房)

ちくま 五七一号 十月

ほく、ほぐす、つくろう(3)

現代思想 四六卷一七号 十一月

●給食の歴史 岩波書店

愚鈍な有力者の言葉

北海道新聞 十一月九日

書評 藤井一至『土 地球最後のナゾ』(光文社新書)

読売新聞 十一月四日

十八年下半年読書アンケート

図書新聞 十二月二日

読書委員が選ぶ「二〇一八年の三冊」

読売新聞 十二月二三日

書評 柳澤治『ナチス・ドイツと中間層―全体主義の社会的
基盤』(日本経済評論社) 西洋史学 二六六号 十二月

書評 ジェイムズ・Q・ウィットマン『ピトラーのモデルは
アメリカだった』(みすず書房) 読売新聞 十二月九日

読書委員この一年

読売新聞 十二月二三日

ほくたちの子育て時評

クローン 二四号 一月

来るべき農業技術に向けて

農業共済新聞 一月一日

書評 村上しほり『神戸 闇市からの復興』(慶応義塾大学
出版会) 読売新聞 一月一三日

書評 多田朋孔、NPO法人地域おこし著『奇跡の集落』

(農山漁村文化協会)

読売新聞 一月二七日

「分解の哲学」終章

現代思想 四七巻一号 二月

「土から目線」で革命的転換を

中央公論 一三三巻二号 二月

書評 黒川創『鶴見俊輔伝』(新潮社)

読売新聞 二月一〇日

ボロとクズの人文学―「どん底」の総合的考察 山室信一、

岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『われわれはどんな「世

界」を生きているのか』ナカニシヤ出版 三月

●われわれはどんな「世界」を生きているのか(共編) 山室

信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編 ナカニシヤ出版 三月

●食べるとはどういうことか―世界の見方が変わる三つの質問

農山漁村文化協会

三月

道草の雑想 道草の達人

三月

総合討論(ひと・健康・未来シンポジウム 山極壽一・藤原
辰史+いしいしんじ+竹宮恵子) クローン 三四七号 三月

ひと・健康・未来 二〇号 三月

歴史と物語のあいだ―ナチスが作った「歴史」を手がかりに
(特集 ひと・健康・未来シンポジウム2018京都)

ひと・健康・未来 二〇号 三月

皿の上の帝国主義―解説にかえて リジー・コリンガム(松

本裕訳)『大英帝国は大食らい』河出書房新社 三月

はじめに(シンポジウム 脱原発を生きる―日本の模索、ド

イツの模索 村山聡+藤原辰史+青木聡子) ドイツ研究 五三号 三月

対談 言葉がほどけるととき(徳永進×藤原辰史)

明日の友 二二九号 三月

学校給食から世直し

伝統食だより 二二七号 三月

書評 宮本正興、松田素二『新書アフリカ史 改訂新版』

(講談社) 読売新聞 三月二三日

書評 R.J.エヴァンス『第三帝国の到来』(白水社)

読売新聞 三月三〇日

脱人間の人文学 山室信一編『人文学宣言』ナカニシヤ出版

三月

船山 徹

● 번역으로서의 동아시아 (『仏典はどう漢訳されたのか—スー

トラが經典になるとき』韓国語版) プルンヨクサ社

六月

古松 崇志

金國正旦、聖節禮儀制度和外國使節『十至十三世紀不同政

權間的信息流通及其政治功能工作坊會議論文集』北京大

學中國古代史研究中心 十月

ホルカ イリナ

The Materiality of Translated Books for Children in Mod-

ernising Japan. *Translation Studies: Retrospective and*

Prospective Views 9 (21) Casa Cartii de Stiinta 出版

十二月

つなぐ人文学宣言 山室信一編『人文学宣言』ナカニシヤ

出版

三月

Back to Black and White: From Words to Worlds in the

Classroom. Carmen Sapunaru Tamas and Irina Holca

(eds) *Japan in the World, the World in Japan: A*

Methodological Approach. ProUniversitaria 出版 三月

● *Japan in the World, the World in Japan: A Methodologi-*

cal Approach. (共編) ProUniversitaria 出版 三月

宮 紀子

インノケンティウス4世宛グユク返書 高田英樹編訳『原典

中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会 二月

宮 宅 潔

「中華帝国」の誕生 南川高志編『歴史の転換期 1 B.C.

220年 帝国と世界史の誕生』山川出版社 四月

秦代徵兵制度研究の現在—基本史料の解釈をめぐる

歴史と地理 七一六号 八月

出粟與出貸—里耶秦簡所見戍卒的糧食發放制度

簡帛 一七輯 十一月

關於岳麓書院藏秦簡《亡律》中「廿年后九月戊戌以来」条

法律史訳評 六卷 十一月

岳麓書院所藏簡《秦律(壹)》訳注稿(二)(共著)

東方学報 九三冊 十二月

向井 佑介

雲岡石窟の佛塔意匠 京都大学人文科学研究所・中国社会科学
院考古研究所編著『雲岡石窟』一九卷(中文版) 科学出版
社 六月

書評 黄曉芬編著『交趾郡治・ルイロウ遺跡Ⅱ—二〇一四—
一五年度発掘からみた紅河デルタの古代都市像—』 史林 一〇一巻六号 十二月

和束の石造物 京都学研究会編『京都を学ぶ【南山城編】—
文化資源を発掘する』ナカニシヤ出版 三月

村上 衛

「壁」の喪失—近現代中国における城壁撤去問題について

書評 藤原敬士『商人たちの広州—一七五〇年代の英清貿易』
中国研究月報 七二巻七号 七月

「士」の家計簿—曾國藩の著作より 京都大学人文科学研究所
所附属東アジア人情報学研究中心編『京大人文研漢
籍セミナー八 中国近代の巨人とその著作—曾國藩、蔣介
石、毛沢東』研文出版 一月

人文学からの近代中国経済史 山室信一編『人文学宣言』
ナカニシヤ出版 二月

守岡 知彦

古典中国語UDコーパスのIPFSを用いた表現の試み
情処研報 二〇一八—CH—一八巻六号 七月

データベースの再生と保存についての試論—HNGを例に—
じんもんこん二〇一八論文集 十二月

Integration of a Chinese character ontology and Historical
Glyph Examples. 9th International Conference of
Digital Archives and Digital Humanities (DADH 2018).
十二月

漢字構造情報のIPD化の試み 東洋学へのコンピュータ利
用 第三〇回研究セミナー 三月

森本 淳生

草稿研究 加藤好郎・木島史雄・山本昭編『書物の文化史—
メディアの変遷と知の枠組み』丸善出版 四月

書評 川崎公平・北村匡平・志村三代子編『川島雄三は二度
生まれる』週刊読書人 二月二二日
文学無用論 山室信一編『人文学宣言』ナカニシヤ出版 二月

L'autorité paternelle et l'auctorialité mineure: sur le sujet
de l'écriture chez Rétif de La Bretonne. Zimbun 49
三月

●Qu'est-ce qu'un auteur "extraordinaire"?—à partir des
marges du champ culturel à l'âge classique. Atsuo
MORIMOTO et al. (eds.) Zimbun 49 三月

周縁性と両義性—『ボルノグラフ』とレチフ・ド・ラ・ブル
ルトンヌの初期作品をめぐって 久保昭博・河田学・岩松
正洋編『虚実のあいまいに Le Fictif, ou le réel 大浦康介退

三月

矢木 毅

翻訳 都賢喆 高麗末における明・日本との詩文交流の意義

東方学報 九三冊 十二月

安岡 孝一

人名用漢字の新字旧字：「豎」と「竪」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月五日

広告の中のタイプライター：Brother Valiant JPI-121

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月一二日

人名用漢字の新字旧字：「楽」と「樂」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月一九日

広告の中のタイプライター：Emerson No.3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二六日

人名用漢字の新字旧字：「夢」と「夢」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一〇日

広告の中のタイプライター：Remington Standard Typewriter No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一七日

人名用漢字の新字旧字：「扣」と「控」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二四日

広告の中のタイプライター：IBM Electric Typewriter Model A

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月三十一日

人名用漢字の新字旧字：「実」と「實」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月七日

広告の中のタイプライター：Harris Visible Typewriter No.4

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一四日

パソコンのキーボードは、なぜABC順・五十音順ではないのですか

ことば研究館 六月一五日

人名用漢字の新字旧字：「姉」と「姊」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二一日

広告の中のタイプライター：Underwood Forum

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二八日

人名用漢字の新字旧字：「浅」と「淺」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月五日

広告の中のタイプライター：IBM Selectric

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二二日

人名用漢字の新字旧字：「渴」と「渴」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一九日

文字列検索可能な画像データベース

文字情報データベースの保存と継承 七月二一日

広告の中のタイプライター：L. C. Smith & Bros. Typewriter No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二六日

人名用漢字の新字旧字：「岳」と「嶽」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二日

広告の中のタイプライター：Bar-Lock No.4

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月九日

デジタル図書館としての東アジア人文情報学研究センター KU-ORCAS (東) アジア研究×図書館×デジタルヒュー

マニティーズ

八月九日

人名用漢字の新字旧字：「顔」と「顔」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二三日

広告の中のタイプライター：Victor No.1

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月三〇日

人名用漢字の新字旧字：「箋」と「箋」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月六日

広告の中のタイプライター：Visigraph Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月一三日

人名用漢字の新字旧字：「綿」と「綿」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二〇日

広告の中のタイプライター：Blickensderfer No.8

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二七日

人名用漢字の新字旧字：「尚」と「尙」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月四日

広告の中のタイプライター：Noiseless Typewriter Model 3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一日

人名用漢字の新字旧字：「伝」と「傳」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一八日

広告の中のタイプライター：Smith-Corona Compact 250

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二五日

古典中国語（漢文）の依存文法解析と直接構成素解析

漢字文献情報処理研究 一八号 十月

Universal Dependencies に基づく古典中国語（漢文）の

依存文法解析

センター研究年報二〇一八 十月

人名用漢字の新字旧字：「海」と「海」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月一日

広告の中のタイプライター：Hammond No.1

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月八日

人名用漢字の新字旧字：「呪」と「咒」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月五日

広告の中のタイプライター：Peerless Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二日

人名用漢字の新字旧字：「続」と「續」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二九日

漢文の依存文法解析と返り点の関係について

日本漢字学会第一回研究大会予稿集 十二月

広告の中のタイプライター：Smith-Corona Galaxie

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月六日

人名用漢字の新字旧字：「鋭」と「銳」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月三日

広告の中のタイプライター：Duplex Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二〇日

人名用漢字の新字旧字：「勉」と「勉」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二七日

広告の中のタイプライター：Salter Standard No.6

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月一〇日

人名用漢字の新字旧字：「鵜」と「鵜」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月一七日

広告の中のタイプライター：Woodstock Typewriter No.5

●住民基本台帳ネットワーク漢字辞典 京都大学未踏科学研究
ユニット・学知創生ユニット・人文科学研究所 一月

人名用漢字の新字旧字：「節」と「節」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月三一日

広告の中のタイプライター：Remington Portable No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月七日

人名用漢字の新字旧字：「両」と「兩」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月一四日

広告の中のタイプライター：Royal RP Electric

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二一日

人名用漢字の新字旧字：「冊」と「冊」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二八日

広告の中のタイプライター：Olympia SGE-40 Electric

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月七日

四書を学んだ MacCab + UDPipe はセンター試験の漢文を読
めるのか 東洋学へのコンピュータ利用 第三〇回研究セ
ミナー 三月

人名用漢字の新字旧字：「隣」と「隣」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月一四日

古典中国語 Universal Dependencies で読む『孟子』

センター研究年報二〇一八別冊 三月

広告の中のタイプライター：Smith Premier No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二一日

人名用漢字の新字旧字：「検」と「検」

人

文

第六六号

二〇一九年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品